家庭教師ヒットマンREBORN!　自由な風、来る！～改～

難波 壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　自由な風、来る！～改～

【Ｎコード】

Ｎ６９４５Ｙ

【作者名】

難波　壱

【あらすじ】

※『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！　自由な風、来る！』の改版です。

風間南は交通事故に巻き込まれ、死んでしまった。しかし神の手違いだったため『転生』することになった！転生先は『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！』の世界！！面倒くさがりや＆自由過ぎる性格の南はどうするか！？

南の第二の人生が幕を開ける…

Straordinariamente1　登場人物！～1～

風間（カザマ）　南（ミナミ）

性別　女

年齢　１２

身長　１６５ｃｍ

体重　４５ｋｇ

一人称　オレ

誕生日　９月７日

性格　自由、冷静、興味ないと全然反応を示さない、面倒事が大嫌い、仲間は人一倍大事にする

髪の色　茜色

目の色　黒

髪型　ショートカットで、毛先が外側にハネている

目の形　フランと同じだが、目の下の▼は無い

ファッション　黒、白、青、緑、赤、などの男モノ系

アクセサリー　金属（銀色のみ）、黒や白っぽい色のモノ
（シンプルなモノ）
ピアスを両耳３つ付けてる

必需品　ケータイ、財布、ｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈ、リングペンダント、小型ノートパソコン（電子辞書サイズ）

十雅（トオガ）（神）

性別　男

年齢　不明（本人は『３万年以上は生きてると思うんだけどなー』と言う）

身長　１７５ｃｍ位（南の予想）

体重　不明

一人称　オレ

誕生日　不明

性格　前向き、好奇心旺盛で思ったことはすぐに行う、余計なことを言うことが多い

髪の色　金と銀が混ざったような色

目の色　空色

髪型　南と同じ位のショートカットだが、天パ

ファッション　ラフな服装

アクセサリー　特にない

必需品　特にない

性別　女

山下（ヤマシタ）　咲（サキ）

年齢　１２

身長　１４８ｃｍ

体重　４４ｋｇ

一人称　私

誕生日　１２月１５日

性格　明るい、誰にでも優しい、無邪気、自分では気づいていないが自分第一で自分勝手

髪の色　茶色

目の色　茶混じりの黒

髪型　ロング（腰あたりまである）だが、いつもはお団子にしている

ファッション　清楚系（特に白、薄ピンク）

アクセサリー　かわいいものが好き

必需品　ケータイ、ポーチ（くし、鏡など）ｅｔｃ

Straordinariamente1　登場人物！～1～（後書き）

名前の由来を話しておきます。

まず、主人公の『風間南』。

『南』は男でもありそうな名前にしたかったからですね。

『風間』は…。

三文字がいい、と思って、そこからは何となく…。

『十雅』は…。

『神』＝『ＧＯＤ』　（逆から読む）『ゴッド』→（何かがあった）

『十雅』です。

何があったのかは…。

私の気まぐれでこうなりました。

そして『山下咲』。

これも何となくですね。

あるとしたら、名前順とかいなる時に後ろの方にさせたかったんです。

『や』だと南の苗字、『風間』と離れるので。

こんな理由があってこのような名前にしました！

これからも新キャラ出す時に由来を話していこうと思います♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１　むかつく神と会う！

オレの名前は風間南。

性別…女。

なったばかりの中学１年…とはいっても私立の小学校から中学になっただけだからあんま変わんねェかな。

今は、ズボンの制服着て、カバン持って信号待ち中。

あ？なんで女なのにズボンの制服かって？

ンなモン、スカートなんて着たくねェからに決まってんだろ！

あ、信号が青になった。

「ふぅ…」

オレはゆっくりと信号を渡り始める。

メンドクサイ。何もかもが。

学校行って何になる？

オレには何にもならない。

…もう、アイツはいないから……。

「…つまんねーの」

そう、呟いた時だ。

キキィィィィッッッッ！！！！！

ドカァァンッッッ！！

「！！！？？！？！！！」

オレのすぐそばでトラックと軽自動車の交通事故発生。

あ…。

オレのほうに来る！！？！？？

ドンッッッッッ！！！！

オレは見事に巻き添えをくらい、どれだけのスピードをだしていたのか、数メートル先まで飛ばされた。

「キャァァァァッッ！！！」

「おいっ！　意識はあるか！？」

「き、救急車を呼べ！！」

オレの近くでうるさい声がする。

あー、意識はあるよ…。

？？この赤い血みたいな液体は？

あ、オレの血？

そうだよな、巻き添え食らったもんな…。

死ぬのかな…。

ま、いっか。

悲しむ親はとっくの昔に死んだし……。

それに、親はオレが死んでも喜ぶだろうし…。

あぁ…これでアイツのとこに逝ける…？

思い出す…今までの人生を……。

…懐かしいな……。

「おい！！　死ぬなよ！」

「大至急来てください！！」

あぁ、救急車、呼んだのか…。

でも…。

オレは眠いから…。

「…ろ…きろ…起きろ、風間南！！」

「……」

起きたけど、知らない声なので寝たふりだな。

「起きてくださいよ――――。

じゃないと、オレはず――っとオマエを呼ばなきゃいけないんだよ――」

…それはうざいな。

「…なんだよ」

「おっ　ようやく起きたか」

目を開けるが、やはり知らない男。

髪の色は金と銀が混ざったような綺麗な色で、目は空色。

外人か…？

「で？誰だよテメェは」

「ん？神だ！」

「冗談はいいから誰だよ」

「だーかーらー！！か・み・さ・ま！！！」

……は？

「…信じてねェって顔してんな…」

「アタリマエ。

どこにいきなり『神』っつわれて信じる奴がいるんだよ」

「え――？案外いるぞ？」

「…本当にそんな奴いたら見てみたいな」

「まっその話はおいといて。

なんでここにいるか分かるか？」

ここっつわれても……。

なんもない、あたり一面真っ白。

来たことが無ければ、見たことすら無い。

真っ白過ぎて天井があるのかも分からない。

あ……。

「死んだ…からか？」

「おぉ――！オマエは優秀だな！！正解だ」

「やっぱりなぁ…。

んで、オレになんか用？っつかここドコ？」

一番疑問に思っていることを聞いてみた。

「ここは……まぁ、狭間みたいな場所だ。

神と、神が許可した者した入れねーんだぜ！」

あー、こーやって『自分は本物の神様です』と伝えようとしてんのか…。

残念、オレにその手は効かねーよ。

「反応薄いな…まぁいいけどよ」

「で、どうして死んだからって狭間なんかにいるんだ？

天国なり、地獄なりに早く連れてけよ」

オレとしては、アイツがいる場所希望だな。

「あぁ、じゃあ説明しないとな……悪ィ」

…いきなり頭を下げて謝られた。

「何が？」

するとこの男はバツの悪そうな顔をし、こう言った。

「オマエが死んだの、オレの手違いなんだわ」

……。

「さ、殺気を収めてください…」

今度はビクビクしながら言ってきた。

「あのさー、そんなの無理に決まってるよな？

勝手に殺されたのに、さらに謝罪の気持ちが全く入ってない謝り方。

…ケンカ売ってんのか、このクソ野郎？」

オレは満面の笑みで言ってやった。

目は笑ってないけどな。

「ごっごめんなさいィィ」

男はとっさに土下座した。

うん、正しい判断だな。

「それでいい。ずっとそのままでいろ」

「ハイ…」

「で？オレはこのままよく分かんねェこの真っ白な世界で生きていくのか？」

「いえ…転生してもらいたいのですが…」

は…？

転生？

よく小説とかである、あの転生か？

「なんでだよ」

「普通喜ぶ場所だと思いますが…。

理由は、あなたは本来まだ生きているので、天国にも地獄にも逝けないんです」

逝くって…。

「なので、ほかの…つまり、さっきまで居た世界とは別の、元から“風間南”という人間が存在しない世界にいってもらいます」

「オレが…元からいない世界？」

「ハイ…そうすればあなたは生きられますし、オレも面倒なことしなくて済みますしね★」

てへっ、と右手を頭に当てながら話す男。

ピキィィッ！

あ…オレの中の何かが切れた。

「それで、行く世界なのですが…って、え！？

やめてくださ…。

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ！！！！！！」

「んで？どの世界に行くんだ？」

オレは、全身ボッコボコになった男に向かって聞いた。

なんでこんなにボッコボコになってんだろうな。

笑えてくる。

「か…『家庭教師（かてきょー）ヒットマンＲＥＢＯＲＮ（リボーン）！』の世界です…」

「！？リボーン！？あれはマンガの世界だぜ！？？」

「はい……ダ…ダメですか…？」

男はビクビクしながら聞いてくる。

「…メンドくせーけど、いいぜ…原作も知ってるしな」

知ってる、つってもせいぜいジャンプで読んで、小説はレンタルで読んだ程度だけどな。

だから正確にはあんま覚えてない。

確か…アレだろ？

戦い嫌いなダメ人間の沢田綱吉がリボーンと会って、マフィアにされていくっていう…。

ま、テキトーに過ごそう。

オレが言うと男は花が咲いたような笑顔になり…。

「じゃあ、すぐに行きましょう！！」

立ち上がってオレに手を向けた。

「は？ちょい待て…ってホントにすぐかよ！！」

オレの全身が白く光り始めた。

絶対今すぐ行くことになんだろ！！

まだ聞きてーことあんのによ！

「それじゃあ、第二の人生楽しんでくださいっ！！」

「このッッ！！

次会った時覚悟してろよ――――！！！」

――――――――――――――――――――ここでオレは意識を失った。

真っ白な世界…狭間に1人残った神。

「や、やっぱもうちょい時間かけてからにすればよかった…」

今更後悔している。

だが、もう遅い。

南はこの男、神に次会った時にどうするかを決めているのだ。

「あ、オレの名前教えるの忘れた…」

また後悔が増えた神だった。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２　神からの贈り物！

…ここは？

オレは確か…。

あぁ、そうだった。

勝手に神に殺され、さらに勝手にリボーンの世界に転生させられたんだったな…。

でもここはどこだ？

オレはベッドで寝ていた。

辺りを見渡すと、なんだか見慣れた風景。

なんだ、オレの家じゃん。

起き上がると、紙が一枚。

こんなモノ、オレは置いてなかったな。

…誰からか、想像できたので読んでみた。

『どうも！神です！

これは、言い忘れたことを伝えるために書きました！

まず、オレの名前を教える。オレは十雅（トオガ）！！

いくら神だって、名前くらいあるんだぜ？

今度会ったときは、十雅って呼んでくれよな！

次に、オマエが今いる場所は、この世界でオマエの家となる場所だ！

かなり高級マンションだからな。

もちろん一人暮らしだ。

冷蔵庫に一週間分くらいの食いもんは入ってる。

贅沢な生活ができるぜ～！

次に…この世界でのオマエの設定だ。

両親はすでに他界。

理由は、前世の両親と同じだ。

今は中学生だ　沢田綱吉と同じ学年だからな。

まぁ、オマエ自身の情報は前世からの続き、といった感じだな。

前の学校を辞めて、並盛町に引っ越し、並中に通うことになった。

まぁ、こんな感じだな。

制服はもちろん男子用。

許可も貰ってあるから安心して登校しろ。

あぁ、クローゼットの中に入ってるからな。
学校に持っていくものはベッドの横に置いてあるカバンの中に入ってるからな。
そん中のモノも説明しとくか。

まず、並中の学生証。
次にケータイ。
これはオマエが前世で使っていたモノと全く一緒だ。
三つめは財布。
金は五千円程度だが減ったらオレに言えよ！
生活しやすいくらいに増やしてやるから。
家賃や光熱費もだしてやるよ。
んで、ｉＰｏｔ　ｔｏｕｃｈ。
これは、無いと暇つぶしできねェだろ？
最後に、オレからの贈り物だ！
小型ノートパソコンの形をしているが、特殊能力のようなものが

いっぱい入っている。

もちろん、普通にパソコンとしても使えるからな。

かなり軽いから持ち運びも便利だぜ！

家にあるものは前世のオマエが持っていたモノに少し足した程度だ。

…まあ、こんくらいかな。

じゃあ頑張れ！

オレのことを呼べばオレは出てくるし、オレに会いたいって思いながら寝ればさっきの狭間の世界でオレに会えるからさ！

じゃーな！

十雅』

かなり長い手紙を読み終え、ベッドの隣に置いてあったカバンを取る。

革製じゃない、フツーのスクールバッグの黒。

なんだ、これも前世と同じかよ。

なんか同じモノばかりで転生したって感じしねーな…。

中身を確認すると、手紙に書いてあったものが入ってた。

並中の学生証。

…あぁ、やっぱりオレは転生したんだな…。

この世界には、アイツはいるんだろうか？

前世でのたった１つの悔い。

…もう二度目の人生だ。

この人生で悔いは絶対にしたくない。

そう思い、時間を確認する。

７時１０分頃。

転校初日に遅刻はしたくないので朝食を作る。

…とはいっても、パンを焼くだけ。

そして制服に着替え、前世でも常に付けていたリングネックレスをつけ玄関に行く。

鏡を見たところ容姿は前世と変わっていなかったので安心した。

…もし変わってたら鏡見るたびに『誰だ？』になるしな…。

ま、よかったな。

重たいドアを開け、家を出る。

あぁ…前世の家を出た風景を随分違う。

……もう、オレが知っている風景は家以外に無いのか…。

後悔や、名残惜しい気はしない。

ここから…今から、オレの人生は始まるのだから。

こうして、オレの第二の人生が幕を開けた。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ３　並中！

「あーあ…疲れた」

オレは今登校中だ。

只今の時刻、７時４０分。

ダルイからゆっくり支度した。

それにオレは朝弱いからな。

ハァ、とため息をつき並中へ向かう。

なんで並中の行き方が分かるのかって？

……ホント、何でだろうな。

まぁ…迷うよりマシか。

だんだん並中が視界に入ってきた。

ふむふむ。確かに並中だ。

どんなだったかは忘れたが、『並盛中学校』って書いてあるし。

オレはゆっくりと並中に入っていった。

登校時間は約８分か。

良くも悪くもない。

近すぎるのは嫌いだし、遠いのも嫌いだからな。

ちょっとだけ十雅に感謝した南であった。

同時刻、応接室。

「草壁、今日転校してくるっていう転校生の書類は？」

並盛最強といわれている雲雀恭弥が自分より、はるかに大柄でリーゼントの男に聞いた。

「それが…」

草壁といわれた男は少し戸惑いながら言った。

「名前、住所、電話番号といったものしか分からなかったのですが

…」

「……」

「い…委員長？」

返事をしない雲雀を不思議に思って、草壁は雲雀に声をかけた。

雲雀は無言で草壁から、少ししか書かれていない転校生の書類を取る。

「風間南…久しぶりに楽しめそうだよ」

雲雀は楽しそうに南の書類を置いた。

そんなことも全く知らず、南は職員室へ向かう。

自分のクラスが何組かを知るためだ。

「今日、転校生が来るんですって？」

「そうなんですよ～。私のクラスになりました」

一人の女性教師と男性教師が話していた。

おそらく今日来る転校生は南のことだ。

「１－Ａですかー。風間さん…でしたわよね？」

「あぁ、風間南というらしいですよ。問題児でないことを祈るばかりですね」

南はそれをしっかり聞いていた。

だが、別に怒っている気配はない。

『教師が新しく来る生徒は問題児ではないことを祈るのなんて普通

じゃね？』

と思っているからだ。

「１ーＡね…」

南は職員室に行かなくてもクラスが分かったため屋上へ行くことにした。

『並中といえば、やっぱり屋上だよな！』という理由からだが…。

「おぉー、ここが屋上かぁ…」

まだ朝早く（といってももう7時５０分は過ぎているが）屋上には誰もいなかった。

ここで南に疑問が一つ。

今、原作開始からどのくらい前、または後なのか。

「……まぁ、教室行ったら分かるか」

考えても無駄だと分かり南はボ――っとしていることにした。

キーンコーンカーンコーン…。

学校中にチャイムが鳴り響いた。

「8時の予鈴か…ふぁぁ…」

南を睡魔が襲った。

改めていうが、南は朝がとても苦手だ。

もちろん睡魔などに勝てるハズもなく、勝とうともせず――――。

南は壁に寄りかかってグッスリと寝てしまった。

キーンコーンカーンコーン。

「……んー？８時２５分の予鈴――？

仕方ない…そろそろ行くか…」

南は珍しくしっかり目が覚め、ゆっくりと教室に向かって行った。

「席に着けー。転校生を紹介する」

あれから教室に向かい、担任に『よく教室わかったなぁ』と言われた。

時間もギリギリではあったが間に合った。

「よし。風間ー、入って来い」

「……」

無言でドアを開け、教室内に入る。

「転校生の風間南だ。風間、自己紹介をしろ」

教師は黒板に『風間　南』と書いた。

「風間南だ…。あー、一応女子だけど、まぁ気にしないでいい。

…席ってドコだ？」

『自己紹介か？アレ！？』と言いたそうな奴が何人かいるがドーデモいい。

『かっこいい…』とか言ってる奴もいるが、無視だ無視！！

「あ…ああ。そこの、一番窓側の席だ」

見ると、一番窓側で一番後ろの席が空いていた。

そのままその席に歩いて行って座った。

原作はっと…。

教室内を見渡すと、まだ獄寺もいない。

原作開始前なのか？

…まぁいいか。

オレは眠いので寝ることにした。

「よっ十雅！！」

ただ寝るのもなんだかつまらないと思い、十雅に会いにいったのだ。

「あ、来たか！んで、どーかしたか？ってまた――！？

ぎぃゃぁぁぁぁぁ……！！！」

「当たり前だぁ！！よくも待てと言っているのに勝手に送り込みやがったな！！

名前で呼んでもらったのを感謝して欲しいくらいだ！！」

「うぅ…すみません…」

十雅は正座して言った。

「ふん…まあいい。

それより、今原作開始までどのくらい時間あるんだ？」

「えっと…体育の授業から開始です」

「いつのだよ」

「え…それは……忘れちゃいボブゥ！！！」

十雅が忘れた、と言いそうになった途端、南のアッパーがヒットした。

「使えねーな…じゃあオレはもう行く。
じゃーな！」

「あ！！ちょっちょっと待って！
…ってもういね――――！！！
言い忘れたことがあったのにぃぃ！！」

十雅の叫びがこだました。

パチッと目が覚めた南。

「ねえねえ風間さん！」

「どこから来たの？」

ワイワイと知らないうちにオレを囲んで群れができていた。

イラッときたのは言うまでもないだろう。

「風間さぁーん！」

「…うるせぇ。こっから去れ。

目障りだ」

「かっこい――！！」

「キャ――――！！！」

本当にウルセェの、わかんねーのかよ…。

あぁ、なんかもうメンドイ。

サボってかーえろっ！！

「いいから散れ」

オレが殺気混じりに言うと、皆が散った。

ふぅ…これで帰れる。

今は休み時間。

教師が来る前に、と思いカバンを取る。

そして、のんびりと帰った。

帰り際に南は思った。

『転校初日からサボって大丈夫なのか』

しかしそんなことを気にする南ではないのだった。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ４　雲に会う！

並中に通うことになって、２日目。

１日目はかったるくなって帰った。

「あー、教師に何か言われそーだな…。

ま、無視すりゃいっか」

南は前世で、学校に毎日行くような人間では無かった。

しかし、それで教師に怒られたことは無かった。

だから今、南はのんびりと学校に向かっている。

それも既に遅刻している。

今は９時。

それなのに南は決して焦らない。

そして学校に着いた。

ガララッ。

教室のドアを開けると、教師も生徒も皆、南を見る。

「キサマは転校生の風間だな！？」

教師が聞いてくる。

「…だったら？」

「遅刻だ！転校初日は無断早退。二日目は遅刻。

全く…とんでもない問題児が来てしまったようだな…」

ワザとらしく、声を大きくして言ってくる。

「学校来て何になるんだよ？オレにとってこの学校のレベルは低すぎる。だからタイクツ。

それに、問題児だと言いたければ言えばいいじゃねぇか。オレは何だっていい」

ドカッ、と椅子に座る。

周りが『あの根津が押されてる！！』『すんげーいい気分♪』とか言っている。

根津、というのはこの教師のことだろう。

「…いいだろう。このことは校長にも話しておくがな。

では、風間を無視して授業を進める！！」

根津は授業を再開した。

だが南には、タイクツで仕方ない。

そして何を思ったのか、ふと席を立った。

「……今度は何だ！！」

ため息交じりに聞いてくる。

「……オレを無視すんじゃなかったのか？」

「ぐっ……」

南はそのまま、教室を出た。

向かったのは、屋上。

誰もいない、静かな場所に行きたかったのだ。

ギイィ…。

屋上へと続く、ドアを開ける。

「…あり？先客がいたか…」

屋上には、学ランを着て眠る男子生徒がいた。

そしてその男子生徒は南に気付き、目を開ける。

「君…誰？今は授業中のはずだけど」

「授業なんかつまんねーから抜けたんだよ」

「…その赤い髪…１－Ａに転入した、風間南だね」

男子生徒は立ち上がりながら聞いてきた。

「おっ、正解」

「君は昨日、無断早退をしていて、今日も遅刻している…。

僕が今、ここで咬み殺してあげるよ」

「楽しそうだが、断る。ここで並盛最強の男、雲雀恭弥と戦いたくはないからな」

すると、ピクリ、と反応した。

「…やっぱり、僕のことを知っているのか」

「あぁ。武器は仕込みトンファー。並中大好きな風紀委員長だろ？」

「……君、一体何者？」

男…雲雀はトンファーを構えながら聞いた。

「そんなに警戒しなくてもな…。オレは風間南、それ以上でも、それ以下でもない、ただの一般人」

「一般人なわけないよね。現に君の情報をあまり得られなかった」

「（あーそりゃそうだろうな…）それは残念だったなー。

じゃあオレは学校嫌いな自由を好む者、とでも考えておいてくれよ。

そして秘密主義者、とでも」

ケラケラ笑いながら南は言う。

何を思ったのか、雲雀はトンファーを下げた。

「…どーしたんだ？」

「今、君を相手にしてもつまらなそうだからね。殺る気がある時じゃないと戦わないタイプだろ？」

「おっ正解♪情報に追加しておけ。『気分屋』とな」

「どーでもいいよ」

キーンコーンカーンコーン。

チャイムが鳴り響いた。

「あー、次は体育だったな…」

「次の授業には出なよ」

「えー…（あ、まてよ…確かリボーンの始まりって沢田がボールに顔面直撃するとこだ…）

はぁ、わかったよ」

「じゃあね」

「おう、またな」

こうして南は屋上を出て行った。

そして教室には戻らず、そのまま体育館に向かう。

つまり、制服のままで。

雲雀に『授業に出ろ』と言われて『わかった』と答えたのに、早速約束を破っているが…。

「ん…ここか…」

体育館の目の前に立ち、呟く。

もう授業開始のチャイムは鳴っていて、中では授業中だろう。

再び怒られるのもメンドクサイので、南はこっそりと見ることにした。

もちろん、主人公である沢田綱吉を。

「ぶっ」

ベチャッ、と沢田の顔面にボールが直撃した。

「……アイツが運動神経無いのは知っていた……だけどまさか…ここまでとは…」

南はリボーンの最初の頃の話を知らない。

読んでいたが、黒曜編に入るまでは何となく流し読みしてた程度だった。

第一話はしっかりと読んでいたのだが…。

なので知らないに等しい状況だ。

「……アレがリボーンと会って、あんなに変わるのか…」

沢田のダメダメっぷりを見ながら、南は呟いた。

それから数分経った。

沢田のダメダメっぷりに呆れ、南は帰り始めた。

「さて…これから楽しませてくれよ…？」

遠くから誰にも聞こえないほど小さな声で、そう、言い残して。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ５　霧に会う！

「いよっしゃ～！！学校休みィ！！！！」

今日は学校休みでテンションＭＡＸなんだ♪

え？学校あってもサボってて休みみたいなモンだろって？

気分が違うよ～、気分が～。

休みみたいなことに否定はしないけどな！

だってさ――。

学校サボったらあの風紀委員長サンがオレを咬み殺しに来るんだもん…。

あぁ、球技大会の日もサボって、商店街ウロウロしてた時に会ったのは大変だったな…。

「どーしよっかな――。

アイスでも買って食うか！！」

そう言い、オレは家を出た。

並盛商店街。

オレは今、手にアイスが二個入ったビニール袋を持って歩いている。

なんで二個もかって？

チョコと抹茶と悩んだんだよ。

どうせ十雅の金だしいいや！！ってな。

でも持って帰るとアイス溶けちまうからな――。

お！！ベンチ発見～！

ベンチに座って食うか♪

オレはベンチのある公園に向かった。

「誰もいね――。まぁ、よかったな…」

公園には誰もいなかった。

オレ的には超嬉しいぜ？

うるさいガキ共がいなくて。

オレはベンチに座り、抹茶アイスを食べ始めた。

数十秒経ったら、公園に一人の女の子が来た。

オレと同じ年齢ぐらいだと思う。

…なんか見覚えあるんだよな～。

藍色っぽい肩下まである髪、同じく藍色っぽい大きな瞳、そして真っ白のワンピース。

誰だっけな～？

クラスの奴ではないと思うんだけど…。

悩むのもイヤだし、声をかけてみるか！！

「おい！！オマエ一人？一人ならオレとアイス食わねェ？」

少女は突然声をかけられたことに驚いた様子。

「オレ今もう一個アイス持ってんだ。つい買っちまったんだけど、溶けちまうからさ！！

食ってくんねェ？」

「いいの…？私が食べて…も…」

「いいのってか食ってくれ！！」

「…ありがとう」

少女は顔を少し赤くして、オレからチョコアイスを受け取り、隣に座った。

「どういたしまして。オレは風間南」

「私は…凪…」

「あぁ、よろしくな！凪！」

そして軽く挨拶をして、黙々とアイスを食べる。

「なぁ、凪とオレって前にどっかで会ったっけ？」

「え…無いと思う…」

「だよなー…」

でもなんか知った声なんだよ…。

リボーンの主要キャラ？

でも女キャラで……。

……ん？

クロームってキャラがいたな…。

確か骸の代わり、とか…。

んん？

…クロームはもう一つの名前があって……。

「あ……そうだ。だから見覚えあんのか」

「？」

声に出したから、凪が不思議がっている。

クローム＝凪だったんだよな…。

原作に出たのは少しだったし、小説はうろ覚えだしな…。

「あ、いや…なんでもねぇよ！」

「うん…」

気づけばもうアイスは無くなっていた。

「…なぁ、凪はまだ時間あるか？」

「えっ…う、うん！！」

「じゃあ、一緒に遊ばねェ？」

「い…いいの…？」

「モチロン！！」

っつかオレ的には遊んでほしいしな♪

「…ありがとう。でも、どこ行くの？」

「んーと、ちょっとついてきてくれるか？」

「うん…」

そう言い、オレ達は公園を出た。

「ここだ！！」

オレは凪に言う。

「ここ…？」

「あぁ。『ラ・ナミモリーヌ』っつって、ケーキがかなりウマいらしいぜ！！」

来てみたかったんだよ！！ココ！！

「ケーキ屋さん？」

「そうらしいぜ！オレも来たことないんだけど…。とにかく中入ろう！」

店の中に入った。

「いらっしゃいませー」

おぉ、ケーキのいい匂いだ。

「凪、どれが食べたい？」

「あ…私、お金持ってないから…」

あー、散歩してたような感じだったしな。

「いいって！オレがおごる。ついてきてもらったんだし！」

「でも…」

「いいって、いいって！ほら、ウマそうだぜ？」

「…ありがとう」

「どういたしまして。

オレはチーズケーキにしよっかな…凪は？」

「あ…同じの…」

あー、こりゃ遠慮してんな…。

「分かった。ちょっと待っててくれよ！買ってくる」

「…うん」

そして、ケーキを買い、凪と二人で食べた。

「ウマかった――――！！！噂は本当だったな！！」

「あの…ありがとう…風間…君…」

「南でいいって。ちなみにオレ、女だぜ？」

「え……」

凪は足を止めた。

「あ…ご、ごめんなさい！！！」

「い、いや…しょっちゅうあることだし、気にすんな？」

「でも……」

ま、性別間違えるなんてしちまったら気にするよな…。

オレは別にいいけど。

「んじゃあさ、一つ約束してくんね？」

「約束…？」

「あぁ。また遊んでくれるか？」

すると凪は満面の笑みを見せた。

「うん！！」

「んじゃ、それでチャラっつーことで♪」

「でも…そんなのでいいの？」

「オレは全く気にしてないからいいんだって！あ、あとメアド教えてくれ」

「あ、うん…」

赤外線通信をして、登録する。

あー、そういや登録一人目だな。

前世ではアイツだけだったし…。

ふっ、と笑みが零(こぼ)れた。

「？どうしたの？」

「あ、いや…何でもねぇよ。んじゃ、いつでも連絡してくれよ！」

「うん！」

じゃあな、とお別れをして家に帰った。

二度目の人生で、初めて友達ができた瞬間だった。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ６　風紀委員！

よっす！

南だ！！

皆さんに一つ聞いてもいいですか？

あなたはグッスリ眠っています。

時刻は朝の５時です。

その刹那、携帯電話が鳴り始めました。

マナーモードにしていなかったので、『プルルルルル』と音を鳴らしています。

携帯を見ると、知らない番号。

知らない人でしたし、もちろん出ません。

しかし、その電話は一回切れても何度も何度もかかってきます。

もう５分は経ちました。

でもまだ電話は鳴り続けます。

さて、どうする！？

その？　電話に出る

その？　ムシを続ける

その？　電話を切る

オレがとった行動は、？だ！！

理由？

なんかオレの第六感が、『出ないともっとヒドいことになる』って察知したからだよ。

「もっしもーし」

『君、喧嘩売ってるの？』

「！？この声、オマエ雲雀か？

ったく何の用だよ…。休日のこんな朝早くに…」

『１０分以内に応接室来て「無理に決まってんだろ！！それにイヤだし！！」

来なかったらどうなるか分かるよね？』

「…ワカリマセンガ？ソレガナニカ？」

『まあいいや。じゃあね』

一方的に電話をかけられ、電話を切られ…。

「オレって不幸…」

行かないと咬み殺されるんだろうな～。

メンドクサイけど、戦うことになった方がメンドイ。

「仕方ない…。行くか」

オレは嫌々私服に着替え、朝早い並盛町を歩いた。

「ンで？何の用ですか――？」

ガラッ、とドアを開けながら言う。

「来たんだ。僕が家に行って咬み殺さなきゃいけないかと思ってたよ」

「は！？家って…場所知ってんのかよ！？」

「校長に聞けばいいだけだよ」

「……なら来てよかった…」

うん…本当よかった…。

「でも、なんで私服で来たの？休日とはいえど、ここは学校だよ？」

ヤバい！！！

南は直感した。

今の服装は、黒いダメージジーンズ、紫色のガラの入った長Tシャツの上に緑色のパーカー。

指や手首にはアクセサリーが付いている。

遊びにでも行くの？と言われそうな、到底学校に行くような格好ではなかった。

しかし……。

「まあいいや。それより今日は君に話があってね」

よ…よかったぁぁぁぁぁ！！！！！

極悪非道の並盛中学校風紀委員長様から許しが出たよ～！！！

「話？」

「うん。君、風紀委員に入り「無理」」

即答したよ？

うん。

「断るのなら、学校に私服なんかで来た罰として咬み殺してあげるよ」

「そ、それは丁重にお断りシマス」

「ほら、ここにサインしなよ」

「オイオイオイオイ、勝手に話飛んでね？いつの間にオレが許可したみたいになってんの？！」

「うるさいな。早く書いてよ」

話聞けよ！！コイツ！！！

「む、無理！！って何オレに差し出して「契約書だよ」

あ、契約書？イリマセンケド？」

「だから、君に拒否権はないんだって何度も言ってるでしょ？

早く書いてくれない？僕眠いんだけど」

「オマエが朝5時に呼びだしたんだよな！！

…条件次第で入ってもいいぜ？」

ここで、ピクリ、と雲雀が反応する。

「…条件？」

「あぁ！

一つ目、オレは朝早くに学校に来るつもりはない。一般生徒と同じ時間に登校する。

二つ目、無断欠席、無断早退、遅刻、そういったものを全て許可する。

三つ目、オレの武器の所持を認める。

四つ目、もしもオレが誰かと仲良くなって、そいつと一緒にいて

も攻撃しない。

五つ目、中学校は三年間通って、卒業したら風紀委員は抜ける。

…まぁ、こんくらいかな」

オレは一、二、三、四、五、と指を立てながら話した。

最後のが変だって？

未来編を覚えていますか？

『風紀財団』なんてものがあったでしょう？

あれは並中風紀委員を母体としてある組織ですよ？

ハイ。『？』ばっかでゴメンナサイ。

「……」

雲雀は数秒考えている。

オレは風紀委員に入る気なんてないのさ！！

こんだけ条件を付ければ諦めて――――――――――

「いいよ」

「いいのかよ！？」

――――――――――くれなかった。

「どうせ、『これだけ条件を付ければ諦める』とでも思ったんでしょ。

残念ながらそうはいかないよ」

「NOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！！！！！！！」

オレの悲鳴が朝早い校舎に響いた。

「うるさいよ。早くサインしてくれる？」

「くそ…なんでこんな条件つけてまでオレを風紀委員にさせたいんだよ…」

サインをしながら聞く。

「君は面白そうだからね」

「それだけかよ…あーもー疲れた」

サインをし終え、ソファーに座る。

ふぅ、とため息をついた時。

「失礼します！

委員長！新しく風紀委員に入る者がいると聞いたのですが…」

あ――――、副委員長の草壁サンだ――――。

「本当だよ」

「そうですか…。？この人は？」

そう言い、オレの方を見る草壁さん。

「今日から風紀委員に入ることになっちまいました、風間南ッス

よろしくお願いしゃーす」

「君だったのか…私は副委員長の草壁と言います。あの、こちらを…」

手に持った紙袋を渡された。

「…これ、なんですか…？」

「それは学ランです。風紀委員になった者には着用してもらっているのです」

「……それって女でも着なきゃダメっすか…？」

オレの言葉を聞いて、驚いている。

ま、そうだよな…。

私服も全て男モノだし…。

「…女子……？」

「あぁ。オレは一応女子っすよ…。それでもダメっすか…？」

数秒考える草壁。

そこに雲雀が口を挟む。

「いいんじゃない？風間南は普段も男子用制服着てるからね」

「オマエは黙れよ！！」

「あ、それならよろしくお願いします」

くそう…雲雀が口を挟まなければオレは今まで通りでよかったのに…。

「腕章は委員長が持っていますので受け取ってください。

それでは、失礼しました」

それだけ言い残し、草壁副委員長は応接室を出て行った。

あぁ、そうだ…。

腕章もあんのか…。

「腕章って付けなきゃダ「ダメだよ。付けないと言うのなら、僕が今すぐ咬み殺してあげるよ」」

即答――――――!!!

「じゃ、じゃあさ！！せめて学ランの着方はオレの自由にさせて！！そうしてくれたらちゃんと付けるから！！」

「ハァ…どの道腕章は付けさせるけど、それくらいは自由にさせてあげるよ。

その分仕事は増やすけどね」

「エ――――――――……」

「変更は認めないよ。ほら、腕章」

雲雀は腕章を持ってきて、机の上に置かれている学ランの上に置いた。

「うぃーす…。じゃあ帰る…」

オレは学ランと腕章という拷問（ごうもん）的なモノを持って家に帰ろうとした。

「ねぇ、君って何か武器持ってるの？」

「…ハイ？」

突然悪魔…もはや大魔王様がオレに聞いてきた。

「さっきの条件で『武器の所持を認めろ』って言ったでしょ。どんな武器なのかと思ってね」

あ―――、あれか。

「今ンとこは何も。だけどコレにしよっかな、ってのはあるが…。それでも？」

「うん。どんなものなの？」

「短剣。あ、ただ一刀じゃなく二刀な」

今十雅に作らせてるんだ！

もう何十回かダメ出ししたけど…。

「ふーん…。まあいいや」

…まあいいなら聞くなよ！！

「じゃ、オレ帰るわ。じゃーなー」

こうしてオレは応接室を後にした――――――――。

そして次の日。

オレは遅刻確実…もう１０時なのにも関わらず、ゆっくーりと学校に向かって歩いていた。

……昨日ムリヤリ渡された学ランを着て、腕章をつけてな！！

でも普通の着方はしてないぜ？

Ｙシャツの中に紫色のＴシャツを着ているからな。

ガララッ。

教室のドアを開けた。

皆、静かにオレを…いや、オレの腕章を見ていた。

――――顔を真っ青にして…。

「君！！遅刻してくると…は……」

教師がオレを見て、怒鳴ったかと思いきや、震え始めた。

そうだよな…。

学ラン着て、腕章付けてたらそうなるよな…。

「何か用スか？」

オレは教師に聞いた。

「ななななな何でもないですっっっ！！！いっ、今テストをしているのですが、どうですか？

あ！！嫌ならいいんです！！」

プルプルと手を震わせながらプリントを渡してくる。

まぁ、暇だし…。

中一の問題なんてオレには問題ですらねェし…。

「別にいーっスよ…」

オレはプリントを貰う

『ありがとうございます！！！』とか聞こえるが、気にしない、気にしないっと…。

オレは席に着き、プリントを見る。

理科…か…。

オレはスラスラと書き、一分弱で終わらせた。

それを教師が見ると、

「回収します！！」

と言った。

「先生！まだ１０分しか経ってないのですが…」

「２０分って言ってたじゃないですかー」

とか、いろいろ聞こえる。

「か…風間さんが終わってしまったんだ！！一番後ろの席の人！！早くしなさい！！

その列は後ろから二番目の人！！」

と言って指をさすのはオレの列。

オレがいるからねぇ…。

先ほど文句言っていた声は一瞬で消えていた。

プリントを回収し終えた教師は

「本日は根津先生の代わりなので、説明の仕方が少々変わるかもしれませんが許してください」

と言う。

…どんだけ怯えてんダヨ。

本来なら根津の奴が理科の担当なのか…。

そーだ！テスト返却の時、根津をハメてやろう♪

でも、ヒマだな――。

…よし！

ガタッ。

オレは席を立った。

「！？風間さん！？どうかしましたか！？」

「ヒマだから応接室行きまス――――。そんじゃ」

オレはそのまま応接室に向かってった。

教室に残された教師と生徒達は南の出て行ったドアを茫然（ぼうぜん）と見ていた。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ７　大空と少し仲良くなり、イエローに会う！

「今日も遅刻～♪朝ゆっくりできるってサイコーだな！」

昨日に引き続き、またも余裕で遅刻している風間南だ！

今の時間ー？

１１時になるな、もうすぐ。

でも気にしない、気にしない★

風紀委員として遅刻が許され、超自由人となった南はあり得ない時間でもゆっくりと、一瞬たりとも焦らずに学校に行くのでした。

応接室。

「ねぇ…いくらなんでも初日からあり得ない時間で登校しないでくれる？」

「え――。いーじゃん別に…」

オレは学校に着いて、教室で授業受ける気にもならなかったので、そのまま応接室にＧＯ！したのです。

「それに君は授業もサボってるの？今日一度でも教室に行った？」

「いんや。今学校に来たばかりだけど？」

「じゃあ君は教室で授業受けてきなよ。それとも、書類整理をやるかい？」

「！？なにその究極の二択！！それなら教室行ってくるよ…。

じゃーな！」

オレは嫌々教室に行った。

「ん？すぐに書類整理をやらされなかっただけで十分か…」

ガラッ！！

「「「「「……」」」」」

お！今日は教師までも静かだ。

…アレ？なんか席順おかしくない？

「かかかかかか風間さん！！あなたの席は変えてないのであそこです！！

よろしいでしょうか！？」

「…変えてないってどういうことだ」

「ハイイイイイ！！

実は、効率よく授業を進めるために、この時間だけ席替えをしてもらったんです！！」

「あー…わかった」

効率よく、か…ただ単にバカが後ろに来るようにしただけじゃん。

オレに席の隣は、沢田綱吉…。

確かにバカだけどさ…。

ハァ…ここで原作キャラと関わるのか…？

あんま原作変えたくねェし、メンドイし…。

「よ…よろしくお願いします…風間さん…」

沢田がオレに話しかけてきた。

…沢田ってこんなに度胸ある奴だったんだな…。

「…あぁ…」

オレがそれだけ言うと、周りで

「おい！ツナが風間さんと話してるぞ！！」

「やっぱ最近ツナってすげーな…」

とかいろいろ言っている。

授業は――――

数学か…。

オレ、どの教科でも満点取れる自信あるけど、数学は特に得意なんだぜ？

そして、オレは教科書を開いた。

沢田はきっと、『風間さんも勉強するんだ…教科書になんか書いてあるかな』とでも思ったんだろう。

沢田がオレの教科書を覗き込んできた。

「な！？何これ――――――！！！！？？！？」

沢田がいきなり叫んだ。

正直言って、ウルサ過ぎ。

ボコられたいんですか？と思う。

「……何か用？」

オレが低い声で言い、冷たい視線をぶつけて言った。

あぁ、微量だが殺気も混ぜてるぜ？

周りからは

「ツナ…殺されるんじゃねェか？」

「ご愁傷様」

とか言われてる。

「え！？？あ…あの…」

とモゴモゴ言ってて聞こえない。

「ハッキリ言え」

この一言で周りがこそこそ言っていた声も一瞬で消えました。

「えっと…その教科書、オレ達のと少し違うなって思って…よくわかんないことばかり書いてあるから…」

「あー、これは数学の教科書。

ただ、トップ校に通う高校三年でようやく解けるようになる位のレベルのな」

「あ…ははは…そうなんだ…。

（もう笑うことしかできね――――――！！！！）」

「まぁ…でもこんなの簡単すぎてつまんねェけど。沢田解いてみるか？」

こんくらいなら沢田でも解けんじゃね？

簡単だし。

「イヤイヤイヤイヤ、いいです！！オレはどーやったって解けない

だろうし！！」

「あっそ」

オレはまた寝始めた。

それからはオレを起こさないよう、静かに授業が再開されたらしい。

キーンコーンカーンコーン。

「…昼飯…か…」

どうやら席替えタイムも終わったらしく、元通りの席になっていた。

購買で飯買うか…。

オレはそう思い、席を立とうとしたその時。

「あ、あの！！風間さん！！」

オレを沢田が呼びとめた。

「……なんだよ…」

オレは今、腹減った&寝起き、という不機嫌な状態なのによー。

喧嘩売ってんのかぁー??

「オ…オレに、勉強教えてください!!!」

頭を深く下げて頼んできた。

「…理由」

「は、はい?」

「オレに勉強教えてもらいたい、っつー理由は?」

「オレ…今家庭教師がいるんですけど、その家庭教師が答え間違えるごとにオレに攻撃してきて…。

そっそれで、あんなに難しそうな問題が簡単すぎ、なんて言う風間さんに教えてもらえないかなって思って…」

「（そりゃあ、リボーンはイヤだろうな…）

…よーするに、オレにその家庭教師の代わりをやれっつーことか…。

……まぁ、いーぜ…」

そう思ったのも何となくなんだけどなー。

主人公である沢田（コイツ）がどんくらい頭いいのか…それを知りたかっただけだからな。

オレが言うと、沢田は顔を上げた。

「ほ、本当ですか！？

ありがとうございま「ただし、一回だけな」…そっそれでもいいです！

ありがとうございます！！」

沢田はまたオレに頭を下げた。

――――――ここでまたメンドイことになる…。

「「「「「風間さん！！私（オレ）にも教えてください！！」」」」」

クラスのほぼ全員が言ってきた。

「…イヤだ。オレは一人だけにする。一番最初に言ってきた沢田のみだ。

他の奴に教える気はない」

皆、嫉妬してるよ～。

ドンマイ！

「沢田ー、今日の放課後オマエん家行くからな。場所は雲雀に聞くから。

んじゃーな」

オレはもう授業を受ける気が完璧に失せたので、カバンを持って応接室に行った。

もちろん、購買に寄ってからな♪

放課後。

オレは約束通り沢田の家に来た。

…まぁ、時間がもう遅いけど…日が見えず、暗くなってるな…。

家の場所は雲雀に聞いて借りを作りたくなかったから校長に聞いた。

…答えるの、早かった…。

腕章見たとたん、敬語使いまくりだった…。

ピーンポーン。

「おじゃましまーす」

インターフォン鳴らして、すぐ！？と思ったヤツもいるだろう。

ま、オレは教えてやる立場だからいいんだよ。

「あら？どなた？」

エプロンを付けた女の人が出てきた。

「風間南といいます。沢田…沢田綱吉に勉強教えに来たんスけど…いますか？」

「あら！カッコいい男の子ね！ツナのお友達！？「友達では無いです」

？そうなの？」

っつか沢田の母親にも男だと思われるって…。

そんなに男っぽいか？オレ…。

「はい、そーです。んで沢田綱吉はいますか？」

「ちょっと待ってね。ツナー！！お客さんよー！！」

階段の上に向かって叫ぶ。

「あ、うん！！」

ドダダダダ、と階段を下りてくる。

「風間さん！！来てくれてありがとうございます！！」

沢田の私服…。

超フツーだな。

ってか服に『27』って書いてあるし…。

そんなに自分の名前好きなんだ…。

マグロなのに…。

「べつに。んで、なんの教科？」

「えっと…ほんとは全部教えてもらいたいんですけど、数学…で」

「数学な…じゃあ早く終わらせるぞ」

靴を脱ぎ、階段を上る。

部屋も至って普通だな。

床に座って、一枚のプリントを渡す。

すると沢田は一瞬で真っ青な顔になった。

「あ…あのー。これをやるんですか…？」

「何言ってんだ。当然だろ？」

「…少ししかわかんないんですが…」

「それなら分かる問題だけでも解け。全くわかんないような問題も少し考えてみろ」

「（この人、下手したらリボーンよりもスパルタだ――――！！）

は、ハイ…」

「じゃあスタート」

こうして、オレと沢田のお勉強会が開催しましたとさ。

それから数分。

「も、もう分かんないです…」

「見してみろ……一問もできてない…バカにもほどがあんだろ…」

そう、一問もできてなかった。

簡単なのになー。

ちょっと高校で習う公式を使えばすぐ答え出るのに。

「…これって何年生対象の問題ですか？」

「並中生なら…高校二年？」

「そ、そんなのオレが解けるわけないじゃないですか！！！」

「黙れ」

オレの一言で静まった。

ほんとにコイツは騒がしい…。

ガチャ。

扉が開いて、誰かが入ってきた。

「ちゃおっス」

リボーンだ。

「リ、リボーン！！入ってきちゃダメだって言ったじゃないか！」

「うるせーぞ、ツナ。…で、オマエは誰だ？」

オレの方を見て聞いてきた。

「人の名を知りたいのなら、まず自分が名乗りな」

「……オレはリボーンだ」

「リボーン、ね。オレは風間南。最近沢田のクラスに転校してきた一般人だ」

「やっぱりオマエが風間か…。だが一般人なわけねーだろ」

はい？オレが一般人じゃないだと？

そんなことは無い。

オレは一般人だ。

でも反論するのも面倒だから、まぁいっか。

っつかオレのこと知ってんなら聞いてくんじゃねーよ。

「そー思いたいなら思っとけ。で、何の用だ」

「特に用はねーぞ」

「リボーン！！早く戻ってくれよ！」

「おめーは黙っとけ」

「んな！！」

…このガキ…殺気放ってやがるな…。

警戒してんのか…。

まぁ無理はないだろうけどさ。

第一オレも少し殺気放ってるしー。

お互い様ってことで♪

「…なぁ沢田」

「は、はい！！？」

「オレもうめんどくさくなってきたから帰るな」

「え…あ、はい…あ、ありがとうございました…」

「チビちゃんもじゃーな」

オレがリボーン（チビちゃん）に言うと、さらに大きな殺気を放ってきやがった。

ったく…ムカつくガキだ。

「チビちゃん、なんて呼ぶんじゃねぇ」

「呼び方一つで文句言うな。チビちゃん♪」

「チッ……」

舌打ちとかムカつくー。

オレはそのまま沢田家を後にした。

「リ、リボーン…？」

南がいなくなった沢田の部屋では、リボーンが難しそうな顔をして

いた。

「…アイツ…何者なんだ……？」

「な、何者って…？」

「アイツはオレが最初この部屋に入ってきた時からずっと、殺気を放っていやがったんだ。

オレが放ってた殺気にも動じない…。

おまけにこないだ学校帰りをつけたが、気配が突然消えて見失っちまった。

このオレを撒(ま)いたんだ…ただモンじゃねぇ…」

「おい！！何やってるんだよ！！風間さんを尾行するなんて…」

リボーンの暴露話に鋭くツッコミを入れる沢田。

「…何より、アイツのことを調べてもなかなかヒットしねぇ…情報

が無ぇんだ…。ボンゴレの力を以てしても…な」

「？それって戸籍が無いってこと？」

「いや、そうじゃねぇ…あるにはあるが、情報が少なすぎるんだ…」

「……どういうこと？」

沢田の質問にしばらく考えるリボーン。

「（ツナに言って、風間に警戒心を持たれても困るしな…）

何でもねぇぞ。今の話は忘れとけ」

「じゃあ最初っから話すなよ！！」

「それはともかく、そろそろ飯の時間だぞ」

リボーンは部屋を出て、階段を降り出した。

沢田は疑問を残したまま、ご飯を食べたのであった。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ８　大空ＶＳ嵐！

「あーぁ、昨日は沢田のせいで疲れた――――」

ハァ、とため息を吐きながら南は登校していた。

時刻は９時。

普通は遅いと思うが、南にとっては早い時間。

昨日、雲雀から連絡があったからだ。

１－Ａに転入生が来る、と。

ちなみに二人来るらしい。

南は原作知識で知っている中で、獄寺が転校してくることを知っている。

その転入生が獄寺だと思い、学校に早く行くことにしたのだ。

もう一人が誰なのかは知らないが…。

ガラッ。

「おはようございますっ！風間さん！

今日は1時間目はＨＲで、転校生の紹介をしていました！」

やはり、キビキビと南に説明する教師。

「（来たか…）転校生？」

「はい、獄寺！山下！風間さんに自己紹介しろ！」

南は教師が言った『山下』という人物に驚く。

原作知識はあるが、転校してくるのも曖昧(あいまい)だからである。

ちょっと出てくるモブキャラだと判断し、とりあえず見てみることにした。

そして、山下と呼ばれた女が立った。

獄寺は座ったままだ。

「山下咲といいます。風間さん、よろしくお願いしま「うるせぇ、話しかけんな」…すっスミマセン…」

「「「「「(怖えええええええええ!!!!!!!!!!)」」」」」

南は、咲の声を聞いた途端、『こいつ、ぜってームリ!!絶対にこんな奴は原作にいなかった!!』と悟り、殺気をぶつけた。

「ご、獄寺君！！早く自己紹介をしなさい！」

教師は『南の気分をこれ以上悪くさせてたまるか！』と思って獄寺に言う。

「あー、オレもメンドイんでいーや。後で雲雀に聞くしな」

獄寺は絶対自己紹介なんてしないから時間のムダだということを南はわかっていた。

それよりも、山下という女の存在が気になった。

原作にいなかった人物がいる、このことを説明する方法が一つしか見当たらなかった。

南と同じ『転生者』である。

とりあえず十雅とお話することにして、南は席に座った。

あれから、オレは十雅に会いに行き、聞いた。

「お、南！」

「十雅…あの女は何だ」

「…あの女？」

十雅も知らないのか…？

「オレのクラス…１－Ａに転入してきた奴だ。獄寺と一緒にな…」

「んー？獄寺と一緒に転入してくる奴なんていねーぞ？」

「だから聞いてんだろ…」

「あ、そっか」

やっぱコイツ馬鹿だな…。

十雅はどこからか資料を取り出した。

「んー、やっぱそんな奴はいねーな…。転生者かもしんねぇと思ったが…記録がない」

パラパラと資料を見ながら話す。

「記録？」

「あぁ。転生させたら記録をつけるんだ。これも仕事だからな。
ま、転生させるのは間違えて殺した時だけだからあんま使わないけど…。
南の前にも転生させた奴いるんだぜ？同じリボーンの世界にな」

「へー…。いつ頃？」

「それは教えられない。ま、その内分かるさ」

その内……？

ま、いっか…。

「で、その女の名前は何ていうんだ？」

十雅は資料を閉じ、聞いてきた。

「えっと…名字は『山下』。名前は忘れた…つか知らね」

「『山下』、ね…。とりあえず調べてみる」

「おう、なるべく早くな」

南がそう言うと、十雅は何かを思い出したように「あ」と言った。

「何？」

「あのよ…前に小型ノートパソコン…言いにくいから『パソコン』でいっか。ともかくそれ送っただろ？

あれに特殊能力つけんの忘れてて、今は単なるパソコンなんだけど…」

「…能力ってオマエが考えてつけるのか？」

「ん？まぁそうだな…」

それを聞いて、南はあることを思いついた。

「んじゃ、オレが能力考える」

「あ、いいぜ……ってダメ！！これはオレが考えるものなんだからよ！」

「男に二言は？」

「無い！！……じゃなくてぇぇぇぇ！！！！！」

「よし、じゃあオレが考えるから。だから今はまだ何もつけないでおけよ。じゃーなー」

南は勝手に狭間から現実世界に戻り、そこには自分の発言を後悔する十雅のみが残された。

そして、今いるのは屋上――――――――――。

「オレを裏切るのか？リボーン！！今までのは全部ウソだったのかよ！！？」

「ちがうぞ。戦えって言ってんだ」

「は！？」

南は獄寺と沢田の戦いを見るために屋上に来ていた。

なぜ南が戦いのことを知っていたか。

それは戦い後の獄寺の変化っぷりが面白かったから覚えていたのだ。

「あー早く死ぬ気になんないと死んじゃうぞー」

そう思っている間にも、獄寺から沢田への一方的な戦いが続く。

「復活（リ・ボーン）！！！死ぬ気で消火活動！！！」

バカ、と音を出して沢田の死ぬ気タイムが始まる。

「そーいや死ぬ気見るの初めてだったな…」

南は屋上でボソっと呟いた。

「消す消す消す消す消す…」

沢田の手がダイナマイトの火を消していく。

獄寺は『二倍ボム』を放つが沢田はどんどん火を消す。

そして、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成なために手から一つダイナマイトが落ちる。

こういう場合、一つ落ちるとバランスが崩れるのでダイナマイトはポロポロと落ちていく。

「（ジ・エンド・オブ・俺…）」

獄寺がそう思った途端…。

「消す！！！」

『消火活動』を目的として死ぬ気になった沢田は獄寺の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

「…おー、すごいなー……それ以上にキモイけど。

で、何でオマエがそこにいるんだ……？本来存在しないはずの、イレギュラーさんよぉ…」

南がそう呟いた。

南が大っ嫌いの、本来存在しない転校生――――――山下咲。

彼女が沢田やリボーン達と一緒にいたのだ。

ならば原作と少し変わって進むのではないか…？

そう思って南はかなりイラついていた。

しかし、原作通りに物語は進む――――――。

獄寺が沢田に土下座する。

しかし、この後が変わった。

「ところで、１０代目。この女は誰ですか？さっきから一緒にいますが…」

「…チッ。ここからあの女が関わるのかよ…獄寺、気づかなくてよかったのに…」

南の予想は、当たってしまった。

「あ、この子は山下咲ちゃん…です。今日獄寺君と一緒に転校してきたんですけど…」

なぜか敬語になる沢田。

「山下、オマエは１０代目の何だ！！さっきから馴れ馴れしく１０代目の傍（そば）にいやがって！！」

「（ナイス獄寺ぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！ウザいよな！超ナイス！！！！！！！！）」

南は心の中で獄寺を後押しした。

「えっと…ツナの友達…です。今日なったばかりだけど…」

咲がビクビクしながら言う。

そして、それだけではない。

顔が真っ赤に染まっていた。

「アイツ、転生者っつーことは原作のことも知ってんだよな…。なら何で怯えてるんだか。

そんでもってあの顔は何だ。醜(みにく)い顔に拍車(はくしゃ)が掛かってんぞ」

南は離れていてあまり分からないが、獄寺は咲にかなりの殺気を送っているのだ。

知っていても、まさか会ってすぐに殺気をぶつけられて怯えない人は一般人にはいないだろう。

そして咲は獄寺のことが好きなのだ。

教室でもチラチラ獄寺を見ていた。

「ケッ」

獄寺は咲の存在を自分の中から消した。

そして原作に戻って、不良達が来て、獄寺がダイナマイトでボコボコにした。

「あー、よかった。原作のことを覚えちゃいないが、アイツが獄寺から嫌われて。

どっちかっつーとラッキーだったからいーや」

少し上機嫌になった南はｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈで曲を聴きながら家へと帰った。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ９　教師をハメる！

昨日、明日は理科のテストの返却があると聞いた。

つまり、根津をハメる日だ！

そして…。

今日は、学ランも腕章も付けてないんだぜ！！

…でも、今日はなんだよな…。

今日からじゃないんだよな…。

なんで付けてないのかって？

フッフッフ…。

これこそがあの忌まわしき根津をハメる方法だ！

だから昨日頑張って雲雀から許可を得たんだよ…。

アイツ、人の言ってることムシしやがるから大変だったんだぜ？

昨日にさかのぼってみよう――――――――――――――――――――。

「なぁ、明日だけでもいいから一般の生徒と同じ制服で来て「ダメ」
」

…聞きました！？

この即答っぷり！！！！

「なんでそんなに即答なんだよ！！」

「君は風紀委員でしょ。なら当然だよ」

「だーかーらー、一日だけ！！明日だけでいいから！！！

頼むよ～、極悪非道の風紀委員長雲雀様♪」

「咬み殺してあげようか？」

死にたくはないけど、明日の普通の制服はなんとしてももぎ取る！！！！

「あ、それは丁重にお断り。ホントに頼むって！！」

「…」（ムシ）

「はあああああああ！！！？？！？！？！

ここにきてムシとかなんだよ！！！」

「……」（ムシ）

「……ちょ、ちょっと酷くね？」

「……」（ムシ）

「そーかよ！！ムシかよ！！ならオレはここで頼み続けるだけだ！！！

なあ！！明日…」

と、二・三時間続き雲雀が折れたのだ。

……オマケに大量の書類（今日来る分だけらしいから大量かは分からないけど、きっと大量）も。

よし、逃げよ♪

今思ったけどオレって、一回も風紀委員の仕事してないなー（逃走するから）。

肩書きだけでいいって。

風紀委員とか、『風紀』って掲げただけの不良の集団なだけなんだよな～。

原作では一部しかその様子が書かれてなかったから違うと思うだろうけどな。

おっと、これを雲雀に言うってことは喧嘩売るのと同じことだから言わねえけど。

ま、そーゆーワケで今日のオレは風紀委員と知らないヤツは一般生徒だと思うだろう。

根津とか根津とか根津とか。

あー、根津の驚いた顔が目に浮かぶぜ♪

楽しみだな～♪

そして、理科の時間――――――――――――。

「今日は理科のテストを返却する。呼ばれたヤツは取りに来い。

まず、青山ー」

そして、名前順で呼んでいく。

オレは風間だから、沢田より前かー。

「大久保ー」

「はい」

「風間ー」

「……」

「風間！早く取りに来い！！」

ムシしてる訳ではありません。

爆睡中です。

周りの生徒（風紀委員と知っている生徒）は

「根津のヤツ、風間さんの機嫌を悪くさせんなよ！」

「根津…さようなら」

…とまあ、オレが根津をボコると思っているようだ。

オレとしてはまだ考え中だな。

「風間ぁ！！起きんか！！」

そう言いながら根津は教科書を丸めたもので殴ろうとする。

オレは爆睡中だったが、気配を感じて起きた。

ヒュッ。

パシッ。

なにが起きたかと言うと、根津が思いっきり殴ろうとしてきた（ヒュッ）。

そこでオレの右手だけが動いてそれを止めた（パシッ）。

んまぁ、こんな感じ？

「貴様っ！！」

「ウルセェ。黙りな」

根津のやつ、どんどん顔が真っ赤になってくぞ？

あー、楽しい★

「生徒ごときが生意気なんだ！！

…そうだ、オマエのテストの点数を皆の前で言いふらしてやろう。

えーっと…１００点だ！！

たかが１００て…なにぃぃぃ！！！？？？？！ま、満点？？！？？！！」

「まぁ、簡単過ぎて一瞬で終わったしー？

オレを誰だと思ってんの？」

「ぐっ…まあいい。そうだ、ここで仮定を話してやる。

理科のテストで満点を取りながらも返却時は寝てるやつがいるとしよう。

そいつは間違いなく頭のいいやつのテストをカンニングしている！

それはなぜか！！なぜなら…。

そいつは頭がいいように思わせたいからだぁ！！！！！」

「「「「「「（バカじゃないのか？根津のやつ…。風間さんはホントに頭いいんだよ）」」」」」」

クラス中があり得ないほど静かになり、皆の心の声が一緒になった。

「そー思いたいなら思っとけ。五流大卒の根津銅八郎」

「！！？なぜ…まあいい。後で聞いてやる。

続きだ！川田」

お？案外動揺しなかったな？

まあここでリアクションしちまうと退職すっからな…。

あぁ、オレが根津の学歴を知ってるのは調べたからだ。

転入二日目で根津と会った時にかなりムカついたからさ～♪

後はこっそり雲雀にバレないように調べたんだ！

雲雀にバレたら根津をハメられないじゃん？

あ！そうだ！！こいつムカつくから退職させよ♪

そんな真っ黒いことを考えている内に話は進んでいき、沢田が呼ばれ、仮定をし、獄寺が来て…。

今は校長室。

校長はオレが風紀委員と知っている。

「根津君、まずは風間さんを帰らしていいかね？」

「校長！！いけません！！風間が一番悪い生徒なんです！！」

「きききき君は雲雀君を敵に回したいのか！？」

「何を言ってるんですか校長。そんなのは嫌に決まっていますでしょうに」

「風間さんは風紀委員だ！！！！」

「！！！？？？！？！？！！」

あービビってる、ビビってる♪

「は！そういえば１－Ａに風紀委員がいるとか…。

風間さん！！！ゆゆゆゆゆゆゆ許してください！！！！」

お――――――、見事なド・ゲ・ザ♪

でもな、オレってばさっきのがかなり頭に来てんだ♪

「しょうがないですね～。

実は根津が五流大卒で、４０年前に並中に通ってたってことを教

えるだけでカンベンしてやるよ」

「!?風間さん!それは本当のことなんですか!?」

おっ、いーねーいーねー♪

校長が食いついてきた。

「まー後は本人に聞いてくださーい。

そんじゃ」

オレは校長室を出て行った。

後から聞いたことだが、あの後は根津が退職することになり、沢田と獄寺も何事もなく助かったそうだ。

そんでもって、オレは見事に書類からの逃走を成功させました♪

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１０　ファミリーに勧誘される！

あっという間に７月…もうすぐ夏休みだ。

今日は…６日。

そうそう、いつの間にか沢田と山本が仲良くなってたんだぜ！

何があったんだろーなー。オレこの辺の話覚えてねーんだよ…。

ま、別にいっか。

……別によくないのは、今の状況だ。

場所？並中。

まぁこれは問題ない。

一緒にいる人？

…これが問題ある。

沢田、リボーン（チビちゃん）、獄寺、山本、あの女。

原作でもし、こんなシーンがあったのならば許そう。

だがな、なぜあの女がいるんだ。

全く……。

「おい、チビちゃん。オレを呼んだ理由はなんだ」

「オマエ、ファミリーに入れ」

……はい？

「聞こえてなかったのか？ボンゴレファミリーに勧誘してるっつーことだぞ」

「断る」

「…なぜだ」

あのさ…まず一般人に『マフィアにさせてあげる』と言って喜ぶ人がいるとでも？

このリボーン（チビちゃん）は常識が無いのかな？

「オレはマフィアになるつもりねーし。第一束縛されたり制限されるの嫌いだし？

オレは自由がいいからなー」

「安心しろ。ボンゴレは束縛なんかされねー自由なマフィアだぞ」

…オレが言いたいこと伝わってねーし…。

「…そうだとしても断る。理由はねーがな」

「……そうか。わかったぞ。だが気分が変わればいつでも入れてやるぞ」

あり？案外モノ分かりがいいな。

予想ではこの後もしつこく誘ってくると思ってたのに。

…ま、いっか。

「おい風間。リボーンさんの勧誘を断るたぁどーゆーことだ」

……この声、数回しか聞いたことないから無視でいっかなー。

でもなー、コイツとは気が合うと思うんだよなー。

あの女のこと嫌いなの一緒だし？

だから一応返事しとくか。

「別にいーじゃねーか、オレの自由で」

「良かねーよ！内容も内容だ！ボンゴレに入るのを断るだと？ナメてんじゃねー」

「いや別に…ナメてなんかねーし……」

コイツ、話通じねー……。

「まーまー獄寺落ち着けって」

「テメェは黙っとけ野球バカ！風間！！リボーンさんが勧誘してくださってんだから入りやがれ！」

「だから、嫌だっつの…」

しつこいなー。

だがここで、救いなのか逆なのか、一つの放送が入った。

『風間南さん、至急応接室に来てください。委員長がお待ちです』

…草壁さん……。

…ま、仕方ない…行くか。

「つーわけでオレ行くわ。んじゃな」

「テメっ！おい！」

獄寺が叫んでる気がするが、気のせいだろう。

でもなー、この後応接室行くのも嫌だなー。

帰る…と雲雀が家まで咬み殺しに来そうだからなー。

……しゃーねぇ、行くか。

渋々応接室に向かった。

ガララッ。

「んで、何の用？」

開けながら、室内にいるであろう雲雀に聞いた。

「いい加減、仕事をしてもらおうと思ってね」

「……お疲れ様でしたー」

回れ右！さぁ帰ろう！！

ヒュッ。

「逃がさないよ」

……いや、トンファーで頭殴ろうとするなよ…。

ギリギリで避けたからいいものの、当たってたら…。

「おい、当たってたら頭割れるだろ！」

「君なら避けると思ったからね」

「…なんつーテキトーな根拠…」

「……その言葉、君にだけは言われたくないな」

「何それ、ヒドくね？ま、傷付かないけど」

あぁ、こう会話してる最中もトンファーで攻撃しようとしてきてる

んだぜ？

風紀乱してる委員長だよな、こりゃ。

「…で、仕事するの？」

突然攻撃を止めて聞いてきた。

「いや、しねぇ」

何の悪びれもなく返事をしたからかなぁ？

またトンファーが来たんだよね。

「…やっぱり君は、咬み殺す…！」

ビュッ。

「のわっ！危ねーなぁ！」

仕方ねぇ、逃げるか。

「逃がさないよ」

わー、追いかけてきた…。

校舎だと階段疲れるから…。

よし、外行こう！

ドタドタと階段を降り、あっという間にグラウンド。

…あれ？何だろう…。

ドガアン、って大きな爆発…。

あ、誰か見える。

獄寺、リボーン（チビちゃん）、階段のとこに…10年後のランボ？

あ、爆煙の中からも出てきた。

沢田に、山本……それにあの女か。

あー、嫌なモン見ちまったー。

「見つけたよ」

……。

そろそろと、後ろを見る。

「あは、ははは…？…やぁ、こんにちは」

「君に選ばせてあげるよ。このまま素直に仕事するか、僕に咬み殺されるか」

「なんじゃそら……。あ、じゃあさ、こないだ根津銅八郎の学歴詐称を見抜いたからそれでチャラで！」

いやぁ、あのことが役立つとはな～。

オレがそう思っていると、雲雀が大きくため息を吐いた。

「…何だよ」

「仕方ないね…今日は許してあげるよ「やった！」でも、明日は仕事あるからね」

……。

ん？何か聞こえた？

オレには聞こえなかったなぁ。

「そんじゃな！」

オレはもう何も言われたくないから校門までダッシュした。

「ハァ…どうせ明日も来ないだろうから、放送しないとね…」

南の自由っぷりに疲れた雲雀は、足早に応接室に戻った。

Straordinariamente2　暗殺部隊に会う！

今、オレは飛行機に乗っている。

理由？

十雅からさ、パスポートとか貰ったから。

で、せっかくならイタリアがいいなー、って。

ん？それだけだけど？

オレは思ったことはすぐ実行するからな。

あぁ、今日は平日だから学校あるぜ？サボってるけど。

でさ、イタリア行って、どこ行こう…。

ピザの斜塔でも見に行くか？

…いや、冗談。

ボンゴレファミリー本部？

いやいや、もっと有り得ない。

……よし、決めた！

行き当たりばったり！！

おぉ、こんなことを決めてる間に到着だ。

さて、どこに着くかね…。

「で、早速迷子だ……」

ここ？どっか分からない森の中。

イタリア語読めるんだけどさー、道は知らないんだよ。

人が多いの嫌いだから人避けてたら…。

森でした、みたいな。

人嫌いとか…雲雀に感染させられたな。群嫌い。

「…とりあえず、だ。来た道を戻れば……どっちから来たっけ？」

マズい、これは迷子ではなく、遭難…！？

携帯……『圏外』、ね。予想はしてたよ。

「とりあえず、行き当たりばったりって決めたんだから続けよ」

そしてまたもや道無き道を進む。

1時間ほど歩いただろうか。

視界に大きな建物が入った。

…よし、とりあえず入ろう…。

さすがに疲れてきた…。

ずっと同じ景色って意外とキツいな…。

頑張って走るか…。

走ると意外と近く、すぐに着いた。

でも見張りがいるなぁ…。

「Ｃｉａｏ…」

疲れきった声で挨拶…。

「！？」

「あ、驚かせたなら悪ィ…。って日本語で言ってるけど通じてる？」

「…日本人か」

あー良かった…。

イタリア語でもいいんだけどさ、最近使ってないから自信無いし。

「あぁ…。空港出て、テキトーに歩いてたらここに着いて…。できれば入らせてもらえね？っつかここどこ？」

「…ここは一般人か来るような場所では無い」

「っつーと、マフィア？」

「！！？」

そんなに反応しちゃダメだろ…。

「あ、オレはどっかのファミリーとかじゃなく、普通の奴だから…」

「……ここはボンゴレ独立暗殺部隊、ヴァリアーだ」

…時が止まったとは、正しく今の状況だろう。

確かに、建物にＶＡＲＩＡらしき旗はあった。

それでも来たのがいけないのか？

…最悪だ……。

「おい、どうした？」

「いや、何でも…。やっぱ帰りるわ」

「待て。今から引き返すことはできない。ここの情報を得たのならば他のファミリーにバラす危険性があるからな」

…なら話すな、と思うのはオレだけ…？

「ししししっ。誰そいつ」

「「！！」」

突然中から人が出てきた…。

……でもな、見たことある顔。

「べ、ベルフェゴール様！」

そう、切り裂き王子（プリンス・ザ・リッパー）の異名を持つ、ベルフェゴールだ。

「で、オマエ誰だよ」

「あ、オレは日本人の風間南っつーんだけど…。道に迷ってここに来て…。できれば中に入れてくんね？腹減って喉渇いた…」

「迷子かよ……ま、いーぜ。入んな」

もう逃げるのは諦めた。

だってさ、逃げたら殺されそうじゃん？

今にナイフを投げてきそうだし。

「なぁ、オマエ戦闘とかできる？」

「戦闘っつか暗殺部隊なら殺し合いだろ？」

「オレらはそーだけど、オマエは一般人だろ？あ、それとも殺し合いしたい？」

「アホ。オレはそんなことお断りだ」

オレとベルが普通に会話していることに周りにいる奴らが驚いてる

なー。

別に気にしないけど。

「ってことは一応強いんだ？」

「さぁなー。よく知らん」

「なんだそれ」

こんなことを言ってると、他の者が出てきた。

「う〝お〝ぉい！！誰だそいつはぁ！！」

「ウルセェ！」

ボカッ。

……しまった…。

出てきたロン毛のウルサい奴を殴っちゃった…。

「あ…オレの鼓膜を守るための正当防衛だからな！」

「言い訳になってねぇよ」

違うぞベル！

これは言い訳では無いからな！

「テメエ…ぶっ殺されてーか！？」

「だからさ、ウルサいんだけど？」

もうこーなりゃヤケだー！！

鮫だろうが何だろうがかかってきやがれ！

「…で、ベル。コイツは誰だ」

「風間南っつー迷子。日本人だとよ」

迷子って…。

「迷子…？」

「迷子って言われ方は嫌だけど…。そんで腹減ったから何か貰おうと思ってさ」

オレが付け加えると、納得したようだ。

「でさ、オマエらの名前は？」

そういえば聞いてなかったからな。

オレは知ってるけど、名乗られて無いのに知ってたらおかしいし。

「オレはベルフェゴール。ベルって呼べよ」

「オレはスクアーロだぁ〜」

「ん、よろしくな。ベルにスクアーロ。っつかさ、食堂みたいな場所ってまだ？」

「すぐそこだぜ」

ベルが指した場所には大きな扉。

いい加減に腹がヤバいから勢いよく扉を開け、叫んだ。

「何か飯くれ！！」

…うん、中にいた人たち固まってるよ。

「あ、そこの変な頭の人、何か飯くれ」

頭のてっぺんからだけ緑色の毛が生えてる。ダサ。

「いきなり現れて何言ってるのよ！」

「うわ…しかもオネエ言葉とか…生きる価値無いな」

「黙りなさい！」

あー、コイツいじめるの楽し♪

「うしし♪ルッスーリア、何か作ってやれよ」

「そーそー。ベルの言う通りだぜ？早く作れよ」

「命令になってるわよ！？」

「早く」

「キイィ――！！わかったわよ！」

やべー、おもしろ。

「何でもいいわね！？」

「だから何でもいいっつってるだろ」

「ホントにムカつく坊やね…」

「あ、オレ一応女だぜ？」

「「「は？」」」

…ワオ、三人の声が重なったよ。

ベルとスクアーロ、それと多分ルッスーリア。

「あ、男だと思ってた？」

「…冗談…じゃねェんだよな…」

「う〝ぉ〝い……」

「まさか…私と同類？」

「バカ！ちげーよ！！」

オレがルッスーリアと同類だと？

ナメたこと言うな。

「でさーオマエの名は？」

「私はルッスーリアよん。ルッス姐って「断る」」

誰がルッス姐だなんて呼ぶか。

「それよかまだ？ルッス」

「…姐はダメなのね……。できたわよ、チャーハン」

まだ熱そーだな…。

でも腹減ったから食お。

「いただきー」

ムシャムシャという効果音が出そうな勢いで食べる。

「ん！ふわいほ！」

「いや、何つってるか分からねーから…」

む。ベルは読解力に欠けるな。

仕方ないなぁ。

ゴクリ、と飲み込んで再び口を開く。

「うまいな」

「あんらー。嬉しいこと言ってくれるじゃない！えっと…名前は？」

「ベルに聞け」

「……風間南、だとよ」

ベル、名前を言うくらいで疲れた表情するなよ。

「ありがとね、南ちゃん「シネ」な！？」

ルッスが言った時、オレは殺気を込めて言い返した。

「「「！！！」」」

その殺気に気づき、三人はオレから距離を取る。

…まぁ、普通に警戒するよな、うん。

「テメエ…やはりどっかのファミリーか！！」

「あースクアーロ、違う違う。オレは名前にちゃん付けされたのが嫌だっただけだ」

「……は？」

いや、三人して同じ顔しなくても…。

バタン！

「今の殺気は何だい？」

あ、赤ん坊だー。

マーモンか。

「…そこにいる南ちゃ「あ゛ぁ゛？」…南の殺気よ。でも敵意は無いから大丈夫よ…」

「南…？君のことかい？」

オレの方を向いて聞いてくる。

「そーだぜー？あ、皆もオレのことは呼び捨てでいいからなー」

そう言ってチャーハンを食べるのを再開する。

「「「「（何て自分勝手な奴……）」」」」

んー、やっぱウマい！

「そんじゃ、ごっそさん」

「で、南はいつまでここにいるのかい？」

あぁ、もうマーモンとも名前とか、ここにいる理由とか話したぜ。

「んー、じゃあ帰ろっかなー。明日もサボると雲雀（アイツ）うるさそーだしなー。そーいえばさ、ここのボスって誰？」

その言葉に、皆がビクリ、と反応する。

…あり？ＸＡＮＸＵＳって何かワケアリだっけ…？

んー…リング戦の最後、読み忘れたんだよなー。

ちくしょう…。読んどけばよかった…。

「ボスは……」

あ。なんかシリアス…。

「やっぱ別に話さなくていいや！そろそろ帰らないと日本に着くの遅くなるし…」

っつかさ、今思ったけどレヴィは？

いや別に会いたくないけど…。

「ししっ。それなら空港行く？」

「ん、そーする。…道教えてくんね？」

「道を教えるより送っていく方が早いと、僕は思うよ」

「マーモン…送ってくれんのか？」

「金は取るけどね」

…金大好きなんだな、うん。

「そこはセルフサービスでよろしく♪」

「それなら断「よし行こう、さぁ行こう！」……ハァ。一回だけだからね」

うし！勝った！

と、まぁこんな感じで空港まで送ってもらった。

…リムジンでな。

もう注目されるどころじゃなかったよ…。

ＶＡＲＩＡの皆もオレが荷物無いのに飛行機乗るのに驚く…っつか呆れてたし。

別によくね？

ムッツリ…はいいとして暴君様には会いたかったなー。

ま、仕方ないか。

日本に戻ったら見事に疲れて、次の日もサボったら雲雀に怒られた。

風紀委員に入る時に許可得たのに…。

まぁ、雲雀に何を言われようとオレは気にしないけどな。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１１　嵐と友達になる！

イタリアから帰国し、１日が過ぎた。

今日は休日だー♪

…雲雀から呼び出しされてるけど、オレが行くと思うか？

もちろん、行きませーん♪

今日は商店街とかで放浪（ほうろう）するって決めてんだ！

つーわけで、今は商店街。

商店街には色んな店があるが、オレの行きつけの店になってるアクセサリーショップがある。

女物から男物まである、結構いい感じの店だ。

オレはここでリング、ペンダント、ピアスを買ったことがある。

もちろん男物だが…。

今日は新商品が入荷した、と連絡があったから来た。

あぁ、店長に連絡先教えてんだよ。

最初はオレのことを怖がっていたが、今では良い舎弟(しゃてい)のような存在だ。

ん？それじゃダメか？

大丈夫、オレには何の問題も無いから。

「いらっしゃいませ…と、風間さんでしたか。早速いらしていただき、誠にありがとうございます」

「よ、店長。で新商品ってどれだ？」

「こちらでございます」

持ってきたのは、ブレスレット。

黒い紐のような物が何重かになっているものだ。

うん、なかなかいいな。

「いかがでしょうか？」

「デザインは気に入った。値段は？」

「新商品のため、あまり割引はできなかったのですが…。今は１００円をギリギリ切れるくらいですね」

１０００円か…。

うん、決めた。

「いいぜ、買う。他に新商品あるか？」

「えぇ。只今他のお客様がご覧になっていると思いますが…」

「ソイツ、どこにいる？」

「先ほどまではこちらに…」

そう言われて案内される。

この店、意外と広いんだよな。

それにしても、このオレよりも先に新商品を見るとは…。

気に入らない奴ならぶっ飛ばしてやる。

「あちらのお客様です」

「……アイツ？」

「？はい、そうですが…」

…確かに、アイツはアクセサリー好きだった気がするけどよ…。

まさかここで遭遇するとはな。

近づき、声を掛ける。

「よ、獄寺」

「！？」

バッ、と振り返ってこちらを見る。

「か、風間！何でこんな場所にいやがる！」

「いや、それはオレの自由だろ…。しかもオレはここの常連だし？」

「チッ…」

コイツ…舌打ちしやがった。

「何で最近…前からだけど、ここ毎日サボってたんだよ」

「ん？イタリア行ってた。日帰りだから手ぶらでな」

「は！？イタリアに手ぶらで日帰り！？…何しに行ったんだよ…」

「暇つぶし」

「「……」」

何か変なこと言ったか？

よくあるだろ、こんなこと。

「…ったく…オマエのような奴がリボーンさんの勧誘断って何やってんのかと思えば…」

「別にオレの自由だろ？それにしてもオマエ、なんか沢田に似てきたな。色んな意味で」

「オレが１０代目に？」

あー、そーいやコイツ、沢田第一主義者だったな。

なんか面白いし、アイツ嫌いなの同じだから仲良くなっとくか。

「そりゃなー、ずっと隣にいりゃあ似てくんだろ。右腕なら隣にいるの当然だろうし？」

「右腕…オマエはオレが１０代目の右腕に相応（ふさわ）しいと思うか！」

「だってよー、山本は違うだろ？あの女はウザイからそこで論外。そうすると獄寺が残るしな」

あ…これってつまり、残り者ってことになるな…。

ま、気分が良い今の獄寺は気づかないだろ。

「オマエ…よく分かってんじゃねーか！」

ほらな、やっぱり。

頭脳は良い方だと思うのに、アホなんだよ、コイツ。

「…なんか嬉しそーだな…」

「オレは１０代目の右腕として一生１０代目に仕えると、今改めて決心した！」

…あっそ。

なんかコイツと会話すんのメンドくなってきた。帰ろ。

「店長ー、さっきのやつだけくれ」

そう言いながら１０００円札を渡す。

「はい、こちらでございますね。ありがとうございます。お釣りの方が…」

「あ、釣りはいらん。小銭邪魔だし」

小銭って邪魔じゃね？

最近いつも思うんだけどさ。

「では募金箱の方に入れさせていただきます。こちらお品物になります」

「ん。あ、獄寺。アドレス教えてくれよ」

「あぁ」

ピピッ、と赤外線通信をする。

「あー、オレのことは呼び捨てでいっから」

「んじゃあオレも隼人でいいぜ」

「んー、わかった。そんじゃな、隼人」

そして店を出た。

この世界に来て、友達が二人…ん？雲雀もか…？

…雲雀も含めたらこれで三人目。

……前世より多いな。

なんか久しぶりに凪と遊びたくなってきたな…。

もうすぐ夏休みだし、誘ってみるか。

そう思いながら家に帰った。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１２　問７を解く！

あっという間に夏休み！

…なのに、今は学校…それも応接室にいる…。

ハァ…まぁ朝早くはないから少しはマシだな…。少しは。

「ねぇ、聞いてる？」

雲雀（コイツ）にしては、だがな。

「見回りだろー？ヤ・ダ！！」

ギロリ。

うわぉ！

雲雀サンが睨みつけてきたよ！

「咬み殺されたい？」

「結構でーす」

「やっぱり君は人をイラつかせるのが上手だね」

やべぇ…。

結構…キレてる？

よし、とりあえず話題を変えよう。

「そーいえばよ、何で風紀委員が応接室使えてんだ？まだ委員会で部屋は持てないだろ」

「…僕が言ったんだよ、ちょうど君が転入してくるのに合わせてね」

「なぜオレが来る時と一緒に……」

「君は楽しめそうだったからね。僕が特定の場所にいて、いつでも君を呼び出して咬み殺せるようにしておきたかったんだ。

それに、元から次の委員長会議でそうするつもりだったから」

…ワー、サスガ！ワガママイインチョウ！

「で、仕事してね」

「ふざけんな。全力で拒否する」

あ…しまった。

つい思ったまま言っちまった…。

うん、殺気が溢れてるね♪

「オレ、なんか嫌な予感するから帰る！！んじゃな！」

「待ちなよ…ハァ。相変わらず逃げ足速いね」

オレは世界新記録を超えるような速さで逃げた。

ってか、こんな暑い日に見回りなんてことは絶対にしたくない！！

（注：南は一回も風紀委員の仕事をしてません。）

プルルルルルル…。

「電話…？隼人じゃん」

隼人からの初電話だな。

「もしもしー？どした？」

『１０代目に聞いたんだけどよ、頭良いって本当か？』

「まーな。んで、それが何？」

『ちょっと…分かんねぇ問題があってよ…。今から１０代目の家来れるか？』

す…素直！！

分かんないってハッキリ言った！！

「おう！すぐ行く！じゃ、後で『あのよ…』ん？何？」

少しの間を空けて、隼人は小声で再び話した。

『…今、アイツもいる…。オマエが嫌なのはよく分かるんだけどよ…しょっちゅうオレのこと見てきてウゼェし、できるだけ早く来れねぇか？』

…アイツいんのか…。

アイツは隼人のこと好きらしいから…隼人は今、地獄だな。うん。

隼人でも解けないなら時間かかるだろうし、ちゃっちゃと行って、解いて、帰るか。

「あぁ、わかった。…とりあえず、頑張れ」

『…サンキュ…じゃな』

ピッ

仕方ねぇな…。

そして、一回だけため息をつき、沢田家に向かった。

ピーンポーン。

「おじゃましまーす」

沢田の家に来るの、二回目だなー…。

オレ的には、あんま嬉しくない。むしろ嫌だ。

ま、もうなかなか来ないだろ。

「よっ隼人」

「おう。早かったな」

「か…風間？」

「「風間さん！！？」」

あ、オレ→隼人→山本→沢田の順な
（ツナと一緒に咲も言ってます。）

それにしても、隼人はオレが来ることを知らせてなかったのか？

ま、別にいいけどよ。

「早速だけどコレだ」

ピラッ、と見せられたのは問7。

おいおい…こんなのを解こうとしてたのかよ…。

「…何でこんな問題解いてんだ…？」

「あ、その…オレ達の宿題なんです…」

沢田達っつーと…三枚あるし、沢田、山本、アイツだな。

補習で出されたのかー。

「解けるんだけどよ…こりゃ超大学レベルだな…」

「「「「！？超大学レベル！？」」」」

うるさ…。

「あぁ…答えはー。

ネコジャラシの公式で『４』だな」

こんなのを補習の課題として出すなんて…教師も解けるかどうかギリギリだぜ？

「ネコジャラシの公式って何だ？」

「隼人はもしかしたら知ってるかと思ったんだけどな…。

んー、コレが公式な」

サラサラッ。

「…？」

「あ、説明するよ。

コレが元(もと)で――――――――

んで、公式になる」

「なるほど…」

あー、周りは全く理解できてないな…。

ま、別に関係ねーしいっか。

「とりあえず、答えは４だろ？
なら、それだけ書いときゃ大丈夫なのな」

山本…本当は途中式も書かなきゃダメだけどな…。

「んじゃ、オレは帰るな」

「待て」

「…オレ、早く帰りたいのに何の用だよチビちゃん」

本当だぜ？

さっさと家に帰ってダラダラとしたいんだからさ。

「何でネコジャラシの公式を知ってる…。

コレは大学でも習うか習わないかの問題だぞ」

「オレの前のガッコは超一流なんだよ。

聞いたことねぇ？小、中、高、そして希望の奴は大学と大学院までエスカレーター式の学園」

十雅に、オレの通ってた学園はこの世界でも存在させたってことを聞いた。

同じレベルとして、だ。

「南…それって『帝都王儀林学園（ていとおうぎりんがくえん）』か？」

「あ、さすがに分かった？」

そう言うと、山本（と、咲）の顔色が変わる。

「え…！？あの帝王かよ！？」

「そーだけど？」

「て…帝王？」

沢田は知らねーの？

「ツナ知らないの？日本一の学校で、世界でもトップの学校だよ？」

あーあーあーあーあーあーあー…。

今、何か聞こえた？

聞こえたとしたら、気のせいだぞ！？

「まさか…あの帝王ー！！？？！？」

「で、でもよ南…何で並中なんかに来たんだ？」

あ、隼人が沢田の言葉無視したよ…。

「オレ、もう帝王の大学院のテストを満点取っちまったんだ。

そんで、中学に最初は行ってたんだけど…。

つまんないから、それならフツーのガッコ行こうと思ってな」

あ、この世界のオレの情報は前世の続きになってるんだとよ。

情報を入れておいてくれてよかったよ…。

オレは前世で満点取っていて、自由登校になってたんだ。

あ、制服は男子はズボンで女子はスカートかズボンか自由だったんだ。

高校までだけどな。

そっからは私服…って決まりだったハズだ。

んで、どのくらい頭がいいかはネクタイの色で決める。

小学校は赤。
中学、青。
高校、黄。
大学、緑。
大学院、橙。

って決まり。

オレは紫。

これは大学院をクリアしたレベル。

初めて作った色らしい。

緑までなら今までに2人いたんだとよ。

まぁ、その2人も超ガリ勉で高3の二月に取ったってウワサだったがな…。

ただ、帝王のレベルだから…。

帝王の赤ネクタイをしてる奴なら普通の高校くらいの問題はヨユーで解けるレベルだ。

あ、オレはメンドイのが嫌いだから勉強してないぜ？

「やっぱ南か…」

隼人？何がだよ。

「何が？」

「これだ…見てみろ」

渡されたのは、雑誌。

見開きが開かれてる。

『帝王の大学院をわずか１１歳で卒業！！
今までの、そしてこれからの人類の中でトップの天才！！ミナミ・カザマ！！』

…なんじゃこりゃ…？

オレの写真とか載ってるし…。

写真はダラダラしてる時のだけど、インタビュー記事がオレの言葉とは思えない気持ち悪さ。

うえ……気持ち悪…。

「…オレ、こんなインタビューされた覚え無い…それに、このインタビューの答え…キモ…」

「オレも最近読み返したら見つけて、違うと思ったんだけどな…。

でも顔がオマエだから、会って聞こうと思って持ってたんだ」

ん……インタビュー…？

「あ…思い出した」

「やっぱ南だったか？」

「いや、オレが大学院の卒業証書貰って一ヶ月位経った頃、メチャクチャ人が来て…。

追い払ったんだけど一社だけしつこいから、『勝手にやれ』っつったんだよ。

でもこんな風になってるとはなー」

そーだったよー…。

にしても、気持ち悪すぎるな。

うん。イラつく。

「やっぱなー…って南って世界で一番頭いいんだぜ!?

何でそんな性格なんだよ!!自慢とかもしねーし…」

「メンドイから」

「「「「なんか納得」」」」

おいこら、納得すんなら聞くな。

（南は基本、この中では隼人以外の人に反応しません。）

「やっぱな。じゃあもう帰っていいぞ」

やっぱなって思うなら呼び止めんなよ…チビちゃん。

「ハァ…じゃあ帰る」

こうしてオレが帝王に通ってたことが広まった。

同時刻、職員室でもバレた…。

応接室の人達は、とっくに知っていたらしいがな。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１３　二学期開始！

「くそう、くそう！雲雀のアホ――――――――――――！！！！」

只今全速力で登校中。

何で走ってるのかって？

「書類整理なんて、死んでもイヤだぁぁぁぁぁ――――――！！」

という訳だ。

そうそう、今日から二学期なんだ。

夏休み…特に何もしてねーな。

問７を解いたりしたくらい？

他は…。

あ、またイタリアに行って、ＶＡＲＩＡの奴らと遊んだな。

ま、それも一回だけだったけど。

「確か…体育館で朝会だっ！」

校門での時間はセーフ。

だが、風紀委員は朝会の時にいなくてはいけないらしい。

「着いたぁぁっ！！」

ガラッ、と体育館のドアを開けたら生徒が皆こっちを見て、静かになる。

「雲雀ィィ！！セーフだから書類整理やんねぇからな！」

珍しく群れを見ても怒っていない雲雀を指差して言う。

その時――――――。

キーンコーンカーンコーン。

「うん。ギリギリセーフだね」

雲雀の許しが出た。

「よしっ！！危なかったぁっ！」

思わずガッツポーズ。

「でも、廊下走って来ただろうから書類整理やってもらうよ。今まで逃げた分もあるから」

「イヤだ！！オレは今日忙しいんだ！」

実際は何も忙しくないけどな。

「じゃあ何が忙しいのか言ってみてよ」

「あれとか…これとか、それとか…」

「用事ないのは分かってるんだから、諦めなよ」

「イーヤーだぁぁぁ！！そっそうだ、隼人！！今日オレ用事あるよな！？」

何かテキトーに言ってくれ！

「オ、オレに振ってんじゃねぇ！１０代目に迷惑かかるだろ！」

「何でオレ――――！？」

沢田は白目になっている。

「ダメだ！沢田は今日ボクシング部に来るのだ！！」

うるさ…。

「笹川了平か…。別にそれは自由にすれば？」

「うむ、それならばいい！！」

勝手に話しかけて、勝手に解決してるし…。

何だコイツ…。

「沢田、今日オレ用事あるよなっ！」

「君が無理やり用事作ったって、無駄だよ」

雲雀は黙っとけっ！！

「そ、そうだ！オレはこれからイタリアに行かなければならないんだ！とゆーわけで…「うるさいよ」」

…うるさい、はないだろ…。

オレが頑張って用事を考えているのに…。

「風間南、仮に君に用事があったとしても、書類整理はやらせるからね」

「イヤだぁぁぁぁぁぁぁ」

教師も生徒も、朝会始められなくて困ってるけど、それどころじゃねぇっっ！！

…こうなったら道は一つ！！

「なら逃げるっ！！」

オレはそのまま体育館を飛び出した。

「後で咬み殺してあげるから安心して」

「安心できるかアホっ！！」

このまま家にいてもダメだしな…。

まずは教室に行くぜ！！

そして放課後――――――――――――――――――――。

「うわぁぁぁぁぁっ！！来るなぁぁぁぁぁ！！！！」

雲雀との鬼ごっこ続行中！！

朝からずっとだぜ？

いい加減、体力が…。

でも、途中で休んだりしてるけど。

オレは今外を走ってる。

お？前に何部かのジム！！

ひとまずここに隠れるぜ！！

バタン！！

ドアを開けて侵入。

「あり…？」

中では笹川了平と沢田がお互いに死ぬ気になっていた。

それだけではなく、隼人、山本、笹川京子、リボーン（チビちゃん）、ボクシング部員。

それと――――――

――――あの女。

「南！？何でここに来たんだよ！」

隼人…今沢田が頑張って笹川了平と戦っているけど、それは無視？

「書類整理から逃げたら雲雀に追いかけられてる。ひとまず隠れさせてくれ」

「そ…そーゆーことか…っつかまだ逃げてたんだな…」

本当は見たくないんだけど、今回は沢田の死ぬ気をじっくり見るか。

「入れ入れ入れ入れ！！」

「やだやだやだやだ」

笹川了平のパンチを避けながら断る沢田。

…変な状況だ…。

しかし、勝負は決まる。

「断る！！！」

「ぐはあぁ！！」

ガッ、となかなか強い沢田の右パンチが笹川了平に当たる。

殴られた笹川了平は窓ガラスを割るほど飛んだ。

しかし――――――――――。

「ますます気に入ったぞ沢田！」

「！！？」

「お前のボクシングセンスはプラチナムだ！！必ずむかえにいくからな！」

「もーお兄ちゃんうれしそうな顔してー！」

…変な兄妹だな…。

それしか思うことねぇや…。

「京子ちゃんのお兄さん、大丈夫ですか！？」

何でオレがまたあの女の存在を…。

いやいや、見えない、見えない、聞こえない。

「おう！！京子の友達か！

見ての通りオレはピンピンしてるぞ！」

血流しながら言えるセリフじゃねぇぜ？

「オレも気に入ったぞ笹川了平」

「！？」

「おまえファミリーに入らねーか」

あぁ、またスカウトしてるよ…。

オレは今のうちに…。

「おまえもどうだ？風間」

……。

「何度言われようと答えは同じ。断る」

「何で嫌なんだ？」

「だから、オレはメンドイのが嫌いなんだよ。あと、ウルサイのも嫌いだから断る」

本当だぜ？

オレはこーゆーのが嫌いなんだ。

「またそれか…。まっいつか必ずファミリーに入れてやるぞ」

「何度でも断ってやるよ。んじゃーな」

オレはもう放課後だから帰ることにした。

だが、問題が一つ。

「やあ」

「あ…ドチラサマデショウカ？」

「書類整理、やってもらうよ」

「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！」

見事に雲雀のことを忘れてました。

そして四時間後。

「こ…これで最後だな…？」

「うん　早く終わらせてね」

「うぅ…」

そして、ポン、とハンコを押す。

「おおおおおおお終わった…」

もう肩がイカレそうだ…。

「じゃあ早く帰る準備してね」

「送ってくれんの？」

冗談で言ってみた。

「見回りのついでだよ」

中学の委員会で見回りすんのかよ…。

「とりあえず、サンキュー」

「じゃあ校門に来てね」

雲雀はさっさと応接室を出て行った。

「ってか、荷物これだけだし…」

オレの荷物は、カバン、財布、携帯、小型パソコン。

筆箱や教科書なんてオレにはない。

たまーに授業を受ける時は、教師が渡してくるからな。

カバンを取り、雲雀の後を追う。

「んで…？なんで君は中学生なのにバイク持ってるのかい？」

校門の前にはバイクに乗っている雲雀。

「並盛のボスは僕だよ？」

「あぁ…そーでしたね…」

もう何言っても無駄だ…。

「早く乗りなよ」

「ハイ？」

聞き間違いだよな、うん。

「早く乗りなよって言ってるんだけど」

…どうやら聞き間違いではなかったようだ。

まさかバイク(これ)で送られるとは…。

「ハァ…乗らなかったら殺されそうだし、乗るよ…」

そして後ろに乗る。

「行くよ」

ビュウウウンッ!!

「おいおい!!速度出しすぎだろ!」

「僕にそんなもの関係ないよ」

でも速すぎる…が。

「うっひょうっ♪オレこーゆーの好きだから楽しいぜ♪」

オレ、絶叫系大好きなんだぜ！

「君に楽しんでもらう為じゃないよ」

「まぁまぁ。お、もう家か」

あっという間にマンションが見える。

「着いたよ」

マンションの下でバイクを止めた。

「ありがとなー。んじゃ」

何も言わずに雲雀は帰ってく。

「っと。コンビニ行って飯買ってから帰ろ」

マンションの向かい側にあるコンビニに向かって歩き出した。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１４　誕生日を迎える！

只今、９月６日の夜１１時。

普通なら家で寝ている時間だ。

でも、今日は違った。

理由？

……あのワガママ委員長・雲雀に呼ばれたんだよ！！

電話が来たんだ。

『今から並中の屋上来て』

それだけ言って切られた。

…何のために？

しかも屋上？

……やはり、雲雀が何考えてるのかなんて分からないな。

理解する気もないけど。

「やっと着いた…」

ギィ…。

屋上へのドアを開ける。

「遅い」

…いましたよ。

何か安心したよ…。

すっぽかされてると思ったからな…。

「遅いも何も…。ちゃんと十分以内に来たけど？」

いつも十分以内だからなー。

それに、オレ寝てたんだぜ？

やっぱり雲雀はワガママ大魔王だ。

「じゃあこれからは五分以内に「スミマセン、もう言いません」ならいいよ」

五分以内？

ムリだし、イヤだし、メンドクサイし。

あ、この言葉気に入った。

『ムリだし、イヤだし、メンドクサイし』。

うん。

オレのモットーにしよう！

ん？モットーでいいのか…？

まぁいいや。

あぁ、空がキレイだ…。

星一つも浮かんでないけど、月だけは見える。

…最高ではないか。

あぁ、オレ星って無駄にチカチカしてて嫌いなんだ。

『死んだら星になる』？

オレはそんなの信じない。

第一、十雅から死んだらどうなるか聞いたし。

「ねぇ、何ボーっとしてんの？」

「んー？空がキレイだなーって思って」

雲雀も空を見上げるが、一度見て、再びオレの方に向いた。

「星一つも出てないけど…」

「星なんて無駄にチカチカしてるだけじゃねぇか。オレが好きなの月だし」

「ふぅん…。まぁ確かに月はキレイだね」

雲雀は再び空を見る。

「委員長！！」

ドアを開け、草壁さんが入ってきた。

「何？」

「用意できました。それと、あと五分です」

？

何か用意してたのか？

それに『あと五分』って何が？

「分かった。今から行く。君も行くよ」

「え～…。まぁいいや」

雲雀から睨みつけられたのは言うまでもない。

「ってかどこ行くんだよ」

草壁さんは何も言ってなかったのにコイツ知ってるみたいだし…。

「ついてきたら分かるよ」

「…」

イラっとしたのは、気のせいではないだろう。

「…応接室？」

雲雀が止まったのは、応接室の前。

「うん。入れば？」

「…なんか嫌な予感するんだけど…」

雲雀から言われて良かったことなんて何もない。

「今日のことを企画したのは草壁だよ」

「じゃあ入る」

草壁さんなら大丈夫だろう。

ガラッ。

パパパパパ――――ン…。

「「「お誕生日、おめでとうございます！！」」」

「…は？」

ドアを開けたらクラッカーを浴びた。

？

「誕生日？あ…」

時計を見たら、ちょうど１２時。

日付は９月７日。

「風紀委員って、マメな人だったんだな…」

これしかオレは言えなかった。

だってよ、雲雀率いる風紀委員だぜ？

ビビる…。

「君もこれで１３か」

「うお？！」

あの…あの群れるのが大嫌いな雲雀が…。

この群れを許してるよ…！！

「僕は眠いんだ。早く終わらせてね」

…オマエが呼んだんだよなー??

「雲雀!!」

オレは両手のひらを雲雀に見せる。

「何?」

「プ・レ・ゼ・ン・ト!!」

「…」

何もくれねぇのかよ…。

「じゃあ『特別委員』」

「は？」

何て言った？

「だから、君を『風紀委員会特別委員』にしてあげるよ」

「嬉しくねぇよ！！」

「もう決めたから無駄だよ」

「…」

…こんな勝手に嬉しくない誕生日プレゼントを渡されたよ…。

あぁ、空が青いな～。

他の人には夜だから真っ暗に見えるかもだけど、今のオレには真っ青に見えるぜ。

あ、真っ青ってのもキモイな。

「じゃあ…」

こんなに勝手な奴ならオレからも言ってやる！！

「オレ、これから雲雀のこと『ヒバリン』って呼ぶからな」

ふっふっふっ…。

これは、『吸血鬼ヒバリン』の『ヒバリン』だ！！

アニメを思い出したんだよ！

「咬み殺すよ？」

「じゃあ恭弥でカンベンしてやるよ」

咬み殺されるのは嫌だ。

それに、凪と隼人、大切な人はみんな下の名前で呼び捨てなんだし。

「…」

お？何も言わないってことなら許可したってことか？

「それなら僕も呼び捨てにするよ？」

「別にいいぜー？」

隼人も凪も、呼び捨てだし。

「あ、じゃあこの腕章も付けてね」

雲雀…否、恭弥から渡されたのは腕章。

でも、何も字が書いてない。

風紀委員の腕章の『風紀』って字を消して、黄色の部分を緑に、赤い部分を青にした感じだな。

「2つ付けろと…？」

「うん。『風紀特別委員』ってことだからね」

…やっぱ嬉しくねぇ…。

「じゃあこれからは特別委員って呼ばさせていただきます！！」

「え…、いや…それはナシで…」

草壁さん、それだけは嫌だ…。

「しかし…」

「い、いままで通りでいいッスよ…？」

ただでさえ、『風間さん』ってさん付けされてるんだ…。

「しかし…」

…そんなに『特別委員』ってスゴいものなのか？

オレには理解できない。

「じゃあ命令な。絶対に今まで通りにしろ」

少し殺気を込めて言ってみた。

「わ、わかりました！！」

ん、冷や汗流してるな…。

悪ィ、悪ィ。

「じゃ、オレ疲れたから帰るな…」

「うん。あぁ、今日の委員長会議に君も出てね」

恭弥が言ってる委員長会議ってのは確か、各委員代表一名のみじゃなかったか！？

…風紀委員から二名でいいのか？

「はぁ…あ、じゃあ代わりにしばらく仕事なしで」

「まだ一回しかやってないのに、よく言うよ…。まぁいいよ。ちゃんと出ればね」

へいへい。ちゃんと出ますよ。

「「「お疲れ様でしたァ！！」」」

……ヤクザのボスかい、オレは。

「じゃあね」

…うん、恭弥くらいサッパリした感じで充分。

オレは家に帰った。

朝――――――――。

携帯にメールが二通届いていた。

隼人と凪だ

内容は『誕生日おめでとう』。

あぁ、ありがたいな…。

二人に返信をして学校に行く。

新しい腕章は嬉しくないけど、誕生日プレゼントとしてちゃんと付けて行った。

で、今日は委員長会議があるんだった…。

それまで応接室で昼寝してよ。

この時、オレは予想してなかった…。

「…まさか、寝過ごすとは……」

そう、寝過ごした。

あーぁ…やっちまった。

ま、いいか。

……何でかな？

廊下から殺気がするんだ。

ガララッ。

「よ、お疲れさん」

「君さ…あれだけ言ったのに来なかったね……」

そう、恭弥だ。

「さっき留守電で伝えたけど、寝過ごしたんだって。だからまぁ、どんまいだ」

「ハァ…いいよ、別に。予想通りだから」

「…なんかヒドくね？」

「君が今まで、素直に仕事したことある？」

「ない」

「……だから、どうせ今回も仕事しない、ってわかってたんだよ」

まー、確かにそうだな。

「それじゃ、僕はまだ仕事あるから」

「ん、じゃな」

恭弥は部屋を出て行った。

応接室でする仕事じゃないんだなー。

それからもグダグダしてたら電話が来た。

「ったく…誰だよ」

少しイライラしながらも通話ボタンを押す。

「もしもしー？」

『オマエ、今どこだ？』

…リボーン（チビちゃん）か。

「応接室だけど？」

『…風間は風紀委員なのか？』

「だったら？ってか腕章見たことあるから分かるだろ」

まさか、バカだとは思わなかなかった。

『確認だ。オマエがファミリーに入りたがらないのは、風紀委員があるからか？』

…何でそーなる…？

そこまでして、オレをファミリーに入れたいのかよ…。

「全く関係ねぇよ。何度言おうがオレはマフィアになるつもりは無い。諦めな」

まぁ、関わることになりそうな予感するけど、それは言わない。

『…そーか…。だが、オレは諦めねーからな』

それだけ言って切れた。

ったく…何だよ。

再びソファーで眠ろうと欠伸(あくび)した時、扉が開いて恭弥が入ってきた。

「ふ(ん)、ほうひほほほほわっ(おわったんだ)はんは(もうしごと)」

おぉ、欠伸(あくび)しながらだから言葉になってねぇな。

「…なに言ってるのか全くわかんないんだけど」

「仕事、終わったのか？」

「今のはね。でも他の仕事が溜まってるからまた仕事だよ。君のせいだけど」

溜め息混じりに言ってきた。

「棘々(とげとげ)しいなー。オレは『特別』委員だから仕事しないの」

「そういう意味の特別、じゃないんだけど…」

そして、また溜め息をついた。

「じゃあどーゆー意味の特別だよ」

「君は縛られたりするのが嫌いみたいだから、他の風紀委員に比べて自由なんだよ。服装や、登校時間がね」

あー、風紀委員に入る時の条件か。

「ふーん。ま、いいや」

紅茶とクッキーを取ってきて、ソファーの前にある机に置く。

紅茶とかは応接室にあるんだぜ？

その時だ。

ガチャ…。

「へ〜〜。こんないい部屋があるとはね――。！」

山本と隼人が来た。

何しに来たんだ？

「君、誰？」

あらら…恭弥はかなりイラついてるな。

ま、そりゃそっか。

応接室（じぶんのばしょ）に勝手に入ってきたんだから。

隼人、恭弥を挑発すんなよ…？

挑発したら、タダじゃ済まないだろうし。

「なんだあいつ？」

「獄寺待て…」

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

「！！んだとてめ――――」

「消せ」

ビュッ。

へー、恭弥も優しくなったもんだ。

最初っからボコらず、タバコだけ潰すなんてな。

「南!?」

お、気づいたか。

「南、何でそこにいるんだよ!」

「オレ、風紀委員だぜ?んで、応接室でまったりしてた」

隼人は知ってたと思うんだけどなー。

「へー。はじめて入るよ、応接室なんて」

するっ。

お、沢田が来たか…。

「ね、ねぇツナ…？」

…何か聞こえた？

オレには聞こえなかったなぁ。

「まてツナ！！」

「え？」

「1匹」

ガッ。

うわぉっ。

まぁ沢田はいいんだけど…。

問題は……。

「のやろぉ！！ぶっ殺「隼人待て！！」？」

そう、隼人（このバカ）だ。

オレは叫んで隼人を止めた。

「恭弥も待てっての！！」

オレは止まった隼人に殴りかかろうとしている、恭弥のトンファーを掴む。

全く…コイツら……。

「…何のつもり？南…」

「最初に風紀委員に入るときの条件。

隼人はオレのダチだから、手出し禁止な」

「…」

恭弥は止まったか…。

んで、またもや問題は…。

「南！！コイツは１０代目に手ェ出したんだ！邪魔すんな！」

こちらも、またもや隼人だ。

「…分かった。オレは一度止めたからな」

隼人には沢田関連で何言っても無駄だ。

「それじゃあ、再開しようか」

恭弥も隼人と戦う気になっている。

…これ以上は、ダメだな…。

そして、隼人はやられ、山本もやられた。

うん、あっという間だった。

で……存在を認めたくないが、あの女は？

部屋を軽く見回すと、いた…。

入り口に立っていて、自分が攻撃されないように廊下にいる。

……何だよ……。

なら、来るんじゃねェよ…。

沢田達と関わることが、危険と隣り合わせだということはわかって関わってんだろ…？

それなのに、いつも一緒にいるよな…？

なら、なぜ今助けない…？

オマエにとって仲間は…友達は、その程度のものなのか…。

……だから、オマエは嫌いなんだよ…。

他にも嫌いなことはあるが、これが何より嫌いなんだよ…！！

オレがイラついてる間に沢田は目覚め、死ぬ気になっている。

沢田だって、隼人と山本を守ってる。

なのに、オマエは何だ？

殺意が出てきた。

ピタ。

恭弥と沢田の戦いが止まる。

二人…いや、窓の外にいるリボーン(チビちゃん)もオレを見ている。

「南…？どうかしたの？」

下を向きながら殺気を放っているオレに恭弥が話しかけた。

「…何でもない」

「…そう。ねぇ、君にはもう飽きちゃったな。

そこにいる君、相手になってくれない？」

沢田のことが飽きたのは、オレの殺気を感じたからだろう。

恭弥はリボーン（チビちゃん）に殴りかかる…が。

まぁ、止められた。

いつも頭に乗ってるカメレオンが変化したものによってな。

「ワォ。素晴らしいね、君」

「おひらきだぞ」

爆弾！？

そんなもん投げられたら、応接室もボロボロになるし、オレも怪我

するし！

オレは急いで爆弾を奪い取る。

…間に合え！！

ヒュッ。

爆弾を思いっきり外に投げる。

ドカーン…。

「ふぅー…。おいチビちゃん、こんな危ねぇモンを使おうとするな」

「チッ…」

おいおい、舌打ちかよ…。

「じゃあな」

ぴょん、と窓から降りて出て行った。

恭弥は追わなかった。

沢田、隼人、山本…あの女も消えていた。

「…ねぇ」

「？」

いきなり恭弥が話しかけた。

「あの爆弾に反応できたの？」

「ん？まぁ…」

…ヤバいことしちまったか？

「ふぅん…。ますます南を咬み殺したくなってきたよ」

嬉しそうに、妖しく笑いながら言う。

「…オレは嫌だからな」

嬉しそうな恭弥を止められそうもないので、急いで応接室を出た。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１５　体育祭！

明日はいよいよ体育祭。

オレは、風紀委員…いや、風紀特別委員だからかなり忙しい。

恭弥のヤツ、オレに単なる面倒事係を押し付けただろ…。

何がそんなに忙しいのかって？

まず、一週間前から予算を決め、各委員会との話し合い。

そして、ルールのチェック、出場選手の種目チェック、ｅｔｃ、ｅ

ｔｃ…。

「草壁さんより忙しいじゃねぇかよ！！」

草壁さんも副委員長だから忙しいってことを聞いた。

でも、その比じゃないくらい忙しい。

「これで最後です」

オレには五人手伝いが来た。

それでも、昼寝ができない程忙しいのだ。

だから最近は授業は受けてない。

まぁ、いつも受けてないが…。

でもその仕事を教室でやっている。

周りの目が痛いよ…。

隼人が『手伝うぜ』って言ってくれたけど、遠慮した。

なぜかって？

…全部オレのサインが必要だから意味ないんだよ…。

「…まだあんのか…？」

さっき最後だって言ってたけど、新しい紙を大量に持った人が来た。

「…スミマセン…。ですがこれは我々でも大丈夫な物ですので、お帰りください」

「おぉマジか！！なら頼んだ！」

オレは急いで帰る。

だってさ、また持って来られたら嫌じゃん。

そしてそのまま帰宅完了。

明日、このままサボ…いやいや、ダメだ…。

さすがに明日サボると恭弥がうるさそうだからな。

ソファーで横になる。

「…なんか…眠い…」

よっぽど疲れてたのか、そのまま寝てしまった。

プルルルルルル…。

「電話…」

せっかく気持ちよく寝てたのに…。

ピッ。

「もしもし…」

『今日は朝から仕事あるから、早く来てって言ったよね？』

…恭弥ですよ…。

ってか、そんなこと言われ……たな…。

「悪ぃ…何分以内？」

『今なら２０分』

おぉ？

意外と時間あるから、風呂入ろ。

「分かった。じゃな」

電話を切り、急いで風呂に入る。

そして学ランに着替え、残り五分。

「やべっ…走って行かなきゃ…」

…体育祭始まる前から疲れそうだ、コリャ…。

まぁ競技は出ないけどな～。

「間にあったか！？」

応接室のドアを勢いよく開ける。

「うん。セーフだね」

「フー…」

よかった、よかった…。

でもさ、こっからが忙しいんだよな…。

「はい、書類」

「……どう…も…」

朝っぱらから書類…。

何の嫌がらせだろうな…。

あぁ、昨日に比べたら少ないかな？

「それをあと一時間で終わらせてね」

「……」

文句言う気力も失せたよ…ハァ。

一時間後。

「おーわーったァァァ！！！！」

何とか終わった…けど体育祭開始まで３０分…。

「屋上行って、サボってよ♪」

これなら仕事が増えてもサボれるぜ♪

そして１０分後の応接室――――――――――――。

「南…逃げたね……咬み殺す！！」

何も知らない南は寝てました。

『只今から、並盛中学体育祭を開催いたします』

「ん…」

放送の声で目が覚めた。

もうそんな時間か…。

まっ携帯に恭弥からの連絡はないから寝てよっと♪

『プログラム一番、選手全員による準備…ひひひひひ雲雀さん！！？』

…聞かなかったことに……。

できないな。

何やってんだ？恭弥…。

わざわざマイク使って言うことでもあんのか？

『南…逃げたお礼をしてあげるから出てきなよ』

ヤバい！！

行かなくては！！

え？どうせ咬み殺されるから隠れてればって？

１０で済むのを１００にしたくはない。

急いで屋上から出て、グラウンドに行く。

わー、皆揃ってるよ…。

「それじゃあ早速咬み殺してあげるよ」

トンファーを構え、言ってくる。

さぁ、やっぱり逃げようか♪

「来るなぁぁ――――――――――――！！！！」

……嬉しくない鬼ごっこ開始ー！

「いくよ」

そう言ってトンファーを振り下ろしてくる。

ビュッ。

ひゅっ。

ふー、ギリギリで避けれたよ…。

すると、突然脳内に声が響いた。

『南！』

『あぁ？十雅、今オレ忙しいんだけど！』

『前に言ってた刀、完成したぜ！』

おぉ、マジか！

一瞬恭弥から隠れられれば刀貰って応戦できるな！

『じゃあ、すぐに貰うから準備しとけ！』

『お、おう！』

ふー、これでどうにか戦えるな。

「君…いつまで逃げる気？」

「さぁな！」

そして校舎の陰に隠れる。

「十雅！よこせ！」

小声で十雅を呼ぶ。

「ほら、これだ！」

一瞬にして十雅が現れ、漆黒の刀を渡された。

全てが漆黒の刀だ。

「ど…どうだ…？」

十雅がビクビクしながら聞いてきた。

な、もう何回ダメ出ししたかわかんねーくらいしてるからな…。

「これで合格だ。さっさと姿消せ！」

「あぁ」

十雅は姿を消した。

「見つけたよ」

あー、見つけなくてもよかったのに…。

「！…その刀は何だい？」

「前に風紀委員になる時言ったと思うぜ？」

「あぁ、完成したんだ」

何も言わずにトンファーを振りおろしてくる。

ガギィン…！

トンファーと刀がぶつかった。

「なー、もう許してくれよー。疲れたし」

「……次はちゃんと仕事してね」

んー、確かにそれしか道はないな。

「わぁったよ。んじゃ、またな」

そのまま校舎に入る。

そーだ、また屋上で昼寝しよ。

「…何やってんだ？あのバカ共は…」

隼人と笹川了平がC組の総大将を潰していた。

…この後処理をするのが誰か、分かってんのか…？

…オレなんだよなー。

棒倒しって結構人気ある競技だから審議になるなー。

めんどくさ…。

そして昼――――――――――――。

今は審議中。

「んで？A対B・C合同でいいのか？」

提案者である笹川了平に確認する。

「もちろんだ！！」

熱いなぁ…。

それ以上にメンドクサイ奴だけど。

っつかバカだろ？コイツ…。

倍差あるのに勝てる気でいんのか…？

「じゃあそれで決定～。審議なんて面倒なのは終わりで解散」

周りは『本当にいいのか？』とか聞こえるけど気にしないっと。

そしてすぐに棒倒しが始まる。

合同チームの総大将は恭弥。

A組の負けは更に確実だな。

最初はA組も元気だったが、2対1。

ズガン。

「お、沢田が死ぬ気になったか」

騎馬を作り、圧倒していく。

しかし、些細(ささい)なことで終わってしまう。

「おい芝生メット！てめー今足ひっかけたろ！」

「ふざけるなタコ！人の足を蹴っておきながら！」

…やっぱ短気な者同士だと大変だな…。

ま、普通に考えて乱闘だ。

「…グラウンドが壊れませんように…」

願いはそれだけだ…。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１６　大空の殺しを処理する！

今日は日曜日。

あぁ、久しぶりにゆっくり出来る…。

しかし、そんな時間は長く続かない。

プルルルルルル…。

ピーンポーン…。

「…出たくないなぁ…よし、居留守だ」

ダブル居留守を使うことにした。

しかし、相手が悪かった。

ガキッ。

…何だろう、今のドアが壊れるような音は。

「やぁ」

「…もう少しまともな入り方してくんね？」

「南が開ければいいことだったんだよ」

…居留守の権利なし？

あぁ、電話も恭弥からだ。

「んで、今日は何の用？」

「赤ん坊に貸しを作りに行くんだけど、あいにく僕は忙しくてね…。

だから代わりに南に行ってもらおうと思ったんだよ」

はぁ？ついて行くならともかく、オレ一人で沢田の家に？

「いや「君に拒否権はないよ」…わぁったよ…ハァ」

オレ達はマンションの下まで行く。

家の扉は十雅に直させるか…。

ちなみに、今の服装は学ラン。

…風紀委員の仕事だから学ランにしろっつわれたんだよ…。

恭弥はバイクに乗る。

「なぁ恭弥、オレもバイク欲しい」

恭弥だけバイクで楽するなんて、不公平だろ！

「ふぅん。じゃあちゃんと仕事したらいいよ」

「マジ！？よっしゃ！色は黒な！！」

やっぱさ、色は黒がいいじゃん？

「ちゃんと仕事するのが前提だからね」

「おう！」

そのまま恭弥は消えてった。

オレはさっさと仕事を終わらせたかったから、少し急ぎ足で沢田家に。

ピーンポーン。

「おじゃましまーす」

返事も聞かずに家に入り、階段を上る。

「で、何の用だって？」

部屋に入り、いるであろうリボーン（チビちゃん）に聞く。

「南！？」

「風間！？」

「風間さん！？」

「はひ…？誰ですか？」

「ちゃおっス。早かったな。今ヒバリから連絡あったばかりだぞ」

皆で反応しなくていいのに…メンドクサイから。

「で、恭弥に頼みの内容聞いてないんだけどよ…何？」

そう言った時だ。

ベッドの上の死体に気付いた。

「お♪こいつぁー見事だな♪心臓一発。あ、もしかしてこの死体の処理が頼み？」

「鋭いな、その通りだぞ」

「なっ。はぁ～～！！？何言ってんの～～！！？」

「沢田、ウルサい」

本当、鼓膜破れたらどうしてくれるんだよ…。

「ご…ごめんなさい…」

あ、そーいやアイツは……よし、いねぇな♪

「死体を見つからないように消して、殺し自体を無かったことにしてくれるんだぞ」

「いろんな意味でマズいよそれは！！」

だから、ウルサいっての…。

ハァ…。

「オレが処理すんのはメンドクサイから、後で他の風紀委員よこすわ。んじゃな」

「委員会で殺しもみ消してんの～～！！？」

「それは極秘だ。またな～」

風紀委員のことは極秘さ。

オレはさっさと沢田家を出てった。

あぁ、出ていく時は窓から出てったんだ。

なんでかって？そりゃあもちろん、窓からの方が近いからだよ。

靴は履いたまま家に入ったし？

さて、恭弥に連絡するか…。

「もしもしー？もう終わったけど」

『そう。あぁ、今赤ん坊から連絡があってね。今の死体は処理しなくていいそうだよ』

「ふーん。なら頼んでくんなよ…。で、バイクは？」

『もう並中にあるよ。違うのが良ければ変えるけど』

…いや…変えないでいいよ…もうあるなら…。

「んじゃ、今度並中行った時に見るわ。んじゃな」

ブツリ、と電話を切る。

…早く家に帰ろう…。

さすがに休日にまで学ランでいたくないからな。

行く時よりは遅いけど、少し急ぎ足で家に帰った。

家に帰って、ふと思った。

このままリング戦とかでオレはどうなっていくんだろうか、と。

守護者とかにはならないと思うけど、もしかしたら関わりができるかもしれない。

それが沢田達…主人公達と敵になるポジションの奴とかもしれない。

「なら…変装しなきゃだよな…」

黒曜編はわからないけど、ＶＡＲＩＡ編に関わる可能性は高めだろう。

前にＶＡＲＩＡアジト行ったりしちまったし。

「十雅ー、出てこい」

ソファーに座って、十雅を呼ぶ。

「どうかしたか？」

パッ、と十雅は出てきた。

「あのよ、オレの新しい武器作れ」

「は！？刀以外で、か！？」

「…何か文句でも？」

「いえいえいえいえ、滅相(めっそう)もございません！！」

よし、ならＯＫだ。

「じゃー、どんな武器にするか言うからよーく聞けよ。
武器は千本。針みたいな奴で、本来の千本よりも殺傷能力を高くしろ。
本数は…１０００な」

十雅が一生懸命メモとってるし…。

ま、頑張れ。

「それとは別に、食らったら2、3秒だけ激しい痛みを感じる“痺れ千本”が５００。
そして、５時間は行動不可能になり、常に頭が割れるほどの痛みを感じる“毒千本”も５００。
分かりやすく色も付けてくれ。痺れが黄色で、毒が紫な。
毒千本の解毒剤を錠剤状にしたものも忘れんなよ」

…だんだん十雅の顔色が悪くなってきたな…。

「あ、変装の服はオレが用意するからいい。
それと、パソコンの機能をつけろ。
オレが知りたい奴の体力とかが分かるようになるものと、沢田の超直感がオレには効かないようにするもの。
…とりあえず、今日はこれでいい」

わー、十雅の顔が真っ青な気がするよ。

「……」

「返事は？」

「あ、ハイ！！！すぐに作らせていただきます！！！」

この様子ならすぐに完成するな。

「じゃあ今すぐ作れ」

「はい！！失礼しました！！」

そして十雅は姿を消した。

「さて…オレは変装用の服とかを買ってくるか…」

そして再び家を出た。

結果的に買ったのは、黒の長ズボン、白いシャツ、黒の顔がすっぽり隠れるフードがついた大き目のパーカー、黒い手袋、黒いポーチ、黒い男モノのブーツ。

それと、念のためで青いカツラ。

手袋っつーのは、骸が使っているような手袋だ。

ブーツも、ＶＡＲＩＡが使っているようなものだけどな。

「あとは…名前、だな」

オレの名前に近いのでいっか。

風間…ではなく南に近いのにするか。

南はイタリア語でｓｕｄ……。

なら、『スード』とかにしよっかな。

うん、スードでいいや。どーせテキトーだしな。

で、黒曜編とかが起こるのは…来年…だっけ？

「はぁ…来年になってほしくねーなぁ…」

でも、わかっている。

その時はすぐに来てしまうことを。

だから今できることは、その時に向けて準備をすることだけだ。

……その時は、すぐに来てしまうのだから。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１７　雲のお見舞いで１０年後雷に会う！

「…絶対ウソだろ」

オレは今、恭弥と電話してる……んだけどさぁ…。

恭弥が風邪ひくとか、あり得ないだろ…。

「バカは風邪ひかないっつーし」

『僕はバカじゃないけど』

「いや、戦いバカだな。すぐに強そうな奴に喧嘩ふっかけるからバカなんだよ」

『咬み殺されたい？』

「ほら！元気じゃねーかよ！」

咬み殺すことができるのなら、それは元気ということだ。

『ハァ…とにかく来てね』

ブツッ。

「…話を聞け！！！！」

仕方なく、病院に行く。

あぁ、恭弥が入院してるらしいんだけどよ……アイツは絶対に風邪なんかひかないと思うのに…。

で、オレが呼ばれたんだよ。

『僕がいない間にやってもらう書類を教えるから』らしい。

…よし、全部草壁さんにやってもらお。

バイクに乗り、並盛病院へ向かった。

ガラガラッ。

「恭弥、来たから貸し1な」

「ワォ。僕がそんな事を聞くとでも？」

「…そうだったな…。でも見舞いは無いからな」

「別に期待してなかったからいいよ」

ムッ…。

そう言われると買って来ようかと思うが、そんな面倒なことはしない。

「…そう言われたら買ってくるのが普通だよ」

「欲しいなら欲しいって言えよ～。オレはそうじゃなきゃ買わないからな」

オレの面倒くさがりっぷりをナメるなよ！！

「じゃあ買ってきて」

「へ？」

「だから、何か買ってきて」

恭弥が…。

「素直になった…！！」

「…何？」

「イヤ、何でもない！買ってくるよ」

果物にして、パイナップルも忘れずにな♪

どうせなら骸戦が終わってからだったら良かったのに…。

嫌がらせの意味が分かるから。

「早くしてね」

「へいへい」

廊下を歩いていると、山本が見えた。

…関わらないでいこう…。

「お？風間？」

…バレたか…。

ま、真正面から歩いてたら見つかるよな。

「…だったら何だよ…」

「ハハッ。今ツナが入院しちまっててさ。ん？もしかして風間もツナの見舞いか？」

…誰も理由聞いてねぇし。

「何でオレが沢田の見舞いしなきゃいけねーんだよ」

「そんな事言うなって。ほら、行こうぜ」

「行かねーよ」

ってか行きたくないし。

アイツがいる可能性もあるから。

「まーまー」

…コイツ、ノーテンキ過ぎて殴りたい…。

「やれやれ。トラブルですか？」

…まさか…。

「初めまして、若き師匠」

「……は？」

「お、師匠っつーのは風間のことか？ならオレは先にツナんとこ行ってるな」

…山本…。

何でそんなに馬鹿なんだよ…。

「オマエ、誰？」

知らないフリをしよう。

「師匠、１０年後のランボです…」

いや、知ってるけど…。

「つかさ、師匠って…？」

「あぁ、１０年後で弟子にしてもらってるんです。だから、師匠と呼ばせてもらってます」

…そう…なんだ……。

一体１０年後のオレは何をしてんだよ…。

「てゆーかよ、オマエ誰？オレ、“ランボ”って名前の奴知らねーけど」

「よ…よくボンゴレ…沢田綱吉と一緒にいるんですが…」

あ、なんか落ち込んでるな。

ま、放っておこう。

「あのアホ牛か？死ぬほどウザい」

「そ…そう、です…。

では若きボンゴレに会いに行くので…失礼します…」

ヨロヨロと歩きながら行った。

オレ、そんなヒドい事言ったか？

ま、いっか。

「あ、恭弥のお見舞い」

急いで買いに行った。

「恭弥、買ってきたぜ！！」

ガラッと開けて言う。

「ワォ。意外と早かったね」

「バイクで行ったからな。ほら、コレ」

渡したのは、一般的なお見舞いの果物。

パイナップルは忘れてない。

ああ、恭弥の足元に何人か倒れているけど気にしないぜ？

オレは。

「じゃあ切って」

「は？そんくらい自分でやれよ」

「僕は病人なんだから」

オレが言い返そうとした時、病室のドアが開いた。

「やあ」

「ヒバリさん！！風間さんも～！？」

沢田だ。

「ウルサ…」

「ごっごめんなさい！

ヒバリさんは何で病院にいるんですか？」

「カゼをこじらせてね。

退屈しのぎにゲームをしてたんだが、みんな弱くて…」

「んな――――！！！」

それが普通の反応なんだろうな。

沢田にとっては。
（普通の人の反応です）

「相部屋になった人にはゲームに参加してもらってるんだよ。
ルールは簡単だ。僕が寝ている間に物音をたてたら、咬み殺す」

「一方的――――っ！！？
ってか病院じゃありえない状況だ――――――――――！！！」

ボコッ。

「ごふっ」

「だから、ウルサい」

あまりにウルサいから、腹パンチ一発したんだ。

「あ、あの僕、もうすっかりよくなったんで、たっ…退院します！！」

「だめだよ医師の許可がなくちゃ」

「！！？」

「やあ院長」

「お、院長じゃねーか」

「え〝。いんちょー！！？」

…やっぱ沢田はウザい。

ウルサいのが分からないのか？

「こうして安心して病院を運営できるのもヒバリ君と風間さんのおかげ。

生贄でもなんでもなんなりとお申しつけください」

ペコーッ。

…オレって何かした？

あぁ、よく病院の周りにいる不良をボコってるからか…。

「じゃあそろそろ寝るよ。南は皮剥いておいてね。

ちなみに僕は葉が落ちる音でも目を覚ますから」

「なっ」

「ハァ…分かったよ」

「では失礼します」

「えっ。うそ！！ゲームスタート！？」

恭弥が寝たらスタートだぜ？

そしてまたドアが開く。

ガキが二人現れた。

消えろよ…。

「ガハ…んむむ」

…恭弥起きないよな…？

オレも咬み殺すとか言われないよな…？

沢田がアホ牛を連れて出て行った。

…ヤケにイーピンと目が合うんだけど…。

イーピンって、恭弥に惚れるハズだよな…？

しかも、外見男だけど女だし…。

ドコォン…。

…恭弥…起きるなよ…。

ん？沢田の声が…。

「ヒバリさんか風間さんに惚れてる――――！！」

…オレを選択肢に入れるな。

ドオォン…。

パラパラ。

「……」

「あ、恭弥起きた？沢田が何か爆破させたらしい」

「じゃあ約束通り咬み殺してあげないとね」

…オレはセーフだな。

「わっヒバリさん起きちゃったよ――――！！ぎゃ――――――！！！」

ガツン。

「ふぁ～あ…沢田綱吉もダメだったね。

南、できた？」

「おう、ホレ」

オレが渡したのは、パイナップルをそのまま６つに切ったやつ。

ん？パイナップルってこれでいいんだろ？

…廊下でぶっ倒れている沢田は無視でいっか。

「じゃあ帰っていいか？」

ずっと病院にいるのもイヤだし。

「……ねぇ、これで食べれると思ってるの？」

「さぁ。食おうと思えば食えるだろ」

「…パイナップルの缶詰、食べたことないの？」

缶詰ぇ？

「さぁ？多分あるけど…。それが何？」

「どんな形か分かる？」

「えーっとな…。輪の形だ」

「そう。だからその形に切ってよ」

えー…めんど。

「今、めんどいって思ったでしょ」

「…よく分かったな…」

「それにさ…君、料理できないでしょ」

「ん、そのとーり！オレは単純なものしか作らないし、作れないさ

！飯はコンビニで買ってるしな」

一人暮らしするなら料理できなきゃダメかもしんないけど、オレには必要ない。

２４時間営業のコンビニがあるから。

「あ、パイナップルはもう諦めたから。自力でやるか、院長に頼んでくれ」

「…もういいよ。君に頼むと僕に被害が及ぶからね」

…なんか酷いなー。

「じゃ、オレ帰るわ。早く退院しろよ」

「君に言われなくてもそのつもりだよ」

そして家に帰った。

恭弥が退院して大変な事件が起こる事を知らずに――――――――――。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１７　雲のお見舞いで１０年後雷に会う！（後書き）

はい、南は料理ができません。
これは南の性格のモデル？見本？である私ができないからです。
同じように単純なものならできますが…。
さすがにパイナップルを６つに切っただけで食べませんよ！？
ってか食べれませんし。
南の食生活はコンビニによって支えられています。
ではでは、また次回～！

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１８　命を狙われる！

恭弥が昨日退院した。

そして風紀委員で今日の朝、校門に集まって祝福しようと計画をしていた。

あぁ、オレ以外の風紀委員は実行したみたいだ。

でもな、恭弥は群れが嫌いなんだぜ？

案の定、ボコられてた。

オレは屋上からその様子を見た。

カワイソー。

でも、自業自得だぜ？

そして恭弥が行くであろう、応接室に向かった。

「退院おめでとーう」

「見事な棒読みだね」

「ま、気にすんなよっ！」

「ハァ…」

ま、今まで通りの会話だな。

そりゃそっか。

あ〜、今日から大変な日々が…。

ドカァァン…。

「「……」」

応接室の前の廊下が爆発♪

「あのさ…さっきもオレの近くで爆発音したんだよな…。命狙われてんのかな…」

さっき屋上から降りる時、入り口でも爆発したし…。

「ワォ。良かったね」

「アホ！！良くないわ！」

「でも南なら返り討ちにできるでしょ」

「まぁ…」

ここで、この話は終わった。

数日後の応接室――――――――――――。

「で、何かわかった？」

草壁さんが来ている。

ん？オレはソファーでゴロゴロしてるぜ？

「はい……。爆発物のくわしい正体は不明です。

強い異臭以外、残っているものがほとんどないためで……」

「ふぅん……」

「爆発物をしかけた犯人についても、いまのところ手がかりはつか

めていません。
その手段や動機についても不明です」
「不明ばかりだね。
……報告は、それだけ？」
「いえ。あと、もう一つだけ」
「何？」
草壁さん…恭弥の機嫌を悪くさせるのだけは止めてくれ。
オレに被害が及ぶ。
「実は……これは確実とは言い切れないのですが……。
爆発がおこった場所に、共通点と思われるものがあります」

最近、並中で謎の連続爆発事件が起こっていたのだ。

まー原因は沢田達だと思うけど。

「風間さん、爆発が全てあなたの近くで起こっているんです」

「は？オレ！？」

…まぁ、確かに最近はオレの周りで爆発音よく聞くよ？

でも…ねぇ……。

「はい…もちろん、確実とは言えませんが」

「なんだ、南のせいだったんだ」

「オレのせいでは無い！」

だってオレが悪いわけじゃないし！

オレの周りで爆発させてる誰かが悪いんだし！

「報告は以上です。失礼しました」

草壁さんはどこかに行った。

「…オレ、なんで狙われてるんだろ…」

「知らないよ。まぁ、このままだと並中が破壊されるから僕も手伝ってあげるよ」

「マジで！？サンキュー！」

これでオレが死ぬ確率が低くなったというワケだなっ！！

よしよし…。

「じゃ、オレは教室行くわ。じゃな」

「一応気をつけなよ」

「分かってるって」

…さすがに教室まで来ないだろう…。

ガラガラ～。

ま、普通に授業中だ。

ドカァァン！！

「…またかよ…」

今度は教室前の廊下。

でも爆発が小規模だったからセーフ…。

大規模だったらオレ死んでたな。

あー、コワイコワイ♪

「南、またってどーゆーことだよ！？」

隼人が食いつく。

「最近並中で爆発音が多いだろ？それが全部オレの周りで起きてるんだ…。

あ、草壁さん」

草壁さんが早速来た。

「大丈夫でしたか？」

「まぁな…ってか何でオレが狙われなきゃいけねぇんだよ…」

あぁ、しばらく家にこもろっかな…。

でもそれは辞めよ。

「我々が事件は解明致しますので、ご安心を」

「あぁ。絶対犯人ボコる…」

シーン…。

オレが殺気を放ったせいで教室中が静まり返った。

「んじゃ、ここの処理は頼んだぜ?」

「はい」

草壁さんに任せて授業という名のお昼寝タイムだ。

あぁ、平穏な毎日が欲しい…。

しかしその願いは叶わず、ある日――――――――――――――――――――。

「まっさかココまでやるとはな…」

オレは応接室前の廊下に、ガスマスクをして立っていた。

「応接室のオレ専用ソファーの前に毒料理、か…」

誰かリボーンのキャラで毒料理使う奴いたっけなー。

あ、隼人の義姉のビアンキがポイズンクッキング使ってるな。

確かにアレとビアンキのポイズンクッキングは似てるけど…。

なんか雑な気がするんだよなー。

雑ならビアンキのではないだろう。

「風間さん！」

「お、草壁さん」

草壁がこっちに走ってきた。

「ご無事でしたか…」

「まぁな…オレの代わりに何人かやられたけど」

「爆弾に引き続き毒とは…」

ビアンキでは無い者がポイズンクッキングを使うってことは、ビアンキの関係者か…？

「この事を委員長には…」

「恭弥にはもう連絡した。

アイツ、殺(や)る気マンマンだったから、この件に恭弥は首出さないように言っておいた」

「な！？い、いいんですか！？」

「何が？ってかそうしないとオレが殺される…」

こないだも『君のせいだよね…』とか言って殴られそうになった。

もちろんトンファーで…。

「そう、ですか…。風間さん、この毒で一つ分かりました」

「あぁ、オレも分かってる。狙いは…確実にオレだ」

あ～ぁ…。

なんでこんな平凡なオレが狙われる身に…。

「犯人分かったら…。絶対に殺してやる！！オレの楽しみを奪いやがって！！！」

殺気溢れ出てきて、草壁さん達ビックリしてたね。

アハハハハ…。

さらに数日後――――――。

「風間さん！！」

屋上でのほほ～ん、としてたら草壁さんが来た。

「犯人分かったか？」

「それはまだですが、有力な情報を得ました」

「じゃあ言わなくていいや」

「へ？」

「オレも爆発の正体とか分かってるから。草壁さんは犯人探して来て」

どうせ、爆発はイーピンかアホ牛だ。

毒は…分かんないけど。

問題は、それを行った犯人。

「分かりました。あと、この前も言いましたが…」

「さん付けは辞めてくれって？」

「はい…」

あ～、なんかこの前言われたんだよ…。

『立場的にも風間さんの方が上なので、さん付けはしないでください』って。

「分かった、分かった…。じゃあこれからはさん付け辞めるよ」

「ありがとうございます。それでは」

あー…。

オレはとうとう、風紀委員のナンバー2になってしまった。

まだオレが草壁のことを『草壁さん』って呼んでたからオレ的には誤魔化せてたんだけどなー。

まぁ、過ぎてしまったことは仕方ない、か…。

そして、眠くなったから昼寝をすることにした。

ドオォン…。

「また爆発か…。今回は遠いな…」

オレ狙いなハズだよな？

不思議だ…。

「ま、応接室行こ」

オレは応接室が学校内で一番落ち着く場所になった。

プルルルルルル…。

「ん…もしもし？」

『南、草壁から聞いたんだけど、犯人は草食動物の所のイーピンって子供らしいよ。

それで、草壁達は返り討ちに合ったらしい』

おー、恭弥か…。

「ガキ？なんでオレがそんなヤツに狙われなきゃいけねぇんだよ…。

ってか返り討ちって…」

『知らないよ。それじゃあね』

プツッ。

「おい…。ま、犯人はイーピンか…」

さて、どう殺してやろうか…。

その時、屋上のドアが開いて風紀委員が一人入ってきた。

「風間さん！犯人が…犯人が来ました！！」

もう！？

ま、構わないけどよ…。

「オマエは消えてろ」

「ハッハイィ！」

風紀委員はオレの言った通り、校舎内に消えた。

コツ、コツ、と階段を上る音が聞こえる。

ギィィ…。

ドアが開く。

「…何でオマエがここにいるんだ？

チビちゃん」

いたのは、イーピンではなくリボーン（チビちゃん）だった。

「オレが犯人だからだぞ」

「嘘なのは分かってる。犯人は…」

ズガンッ。

ガキィン！

リボーン(チビちゃん)が銃を撃ってきた。

それを刀で防いだ。

「何のつもりだ」

「犯人は、オレだ」

頑(かたく)なに言う。

「あのな…無駄だって言ってんだよ」

「理由だってあるぞ？オマエが強いか見極めるためだ。弱いとマフィアになれねーからな」

「何言ってんだよ…。それに、オレはマフィアになるつもりは無い」

「…」

ようやく黙ったか…。

「オマエに何を言ってもダメなのは分かった。だから、このことはオレに貸し一つで終わりにしろ」

「……分かった。一つ聞かせろ。何でオマエはアイツを庇(かば)う」

すると、リボーン(チビちゃん)はオレに背を向け、帽子のつばを下げながら言った。

「女にはやさしくするもんだ……。マフィアってのはな」

それだけ言って屋上から姿を消した。

「…ってか、オレも一応女だけどな…」

ポツリ、と呟いた。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ１９　お正月！

あけましておめでとうございます。

あっという間に新年だな。

もう三日過ぎたけど。

…でもさ、まだ正月だよな？

三日過ぎただけじゃ正月は終わらないよな？

……なのになぜ、オレはこんな場所にいるんだろう…。

「なぁ、ホントになんで？」

「知らないよ」

「いや、オマエが呼び出したんだからな！？コノヤロウ」

そう、恭弥に呼び出されて応接室にいる。

新年早々忙しい…。

あー、最近凪と会えてない…電話はしてるけど。

「んで、わざわざ正月に何？」

「仕事だよ。本来なら無いんだけど、君はいつもサボってるから。まだ数回しか仕事してないからね」

んーと、二学期始まった時と、体育祭と…あぁ、沢田が殺した騒動の時か。

あと…根津のも一応仕事だな。オレが楽しんだだけだけど。

「でもさ、いくらなんでも新年は…」

「反論できるくらい仕事してれば良かったんだよ」

…理不尽だ。

「へいへい、わかりやしたよ。仕事は見回りでいいな？つかそれ以外なら断固拒否！」

「ハァ…仕方ないからいいよ。報告は電話でいいから」

あ、電話でいいものなんだ…。

「んじゃな」

オレは並中を出て、バイクに乗った。

さて、どこ行こうかなー。

沢田達は何かしらやってんだろー？

めんどいのには関わりたくねーしなー。

…河原の方なら大丈夫かな？

うん、きっと平気だ……多分。

そのままバイクで川へ向かう。

警察がたまにオレを見るが、学ラン着てるから何も言われない。

やっぱ便利だな…。

オレは６０キロは出してバイクに乗っている。

そんな奴を許す程、恭弥が怖いのか…。

あぁ、そうそう。

オレはもっと仕事してたわ。

よく風紀を乱している人を見つけるけど、ストレス発散のために、かなりボコボコにするし。

それは並盛のほぼ全体に起こってて、今は伝わってるらしいな。

だから恐れらている並中の風紀委員は、委員長の恭弥と特別委員のオレって噂も聞くが…。

ま、気のせいだろ。

「ん…アレは？」

川沿いをバイクで走ってると、何人かの集団が見える。

キキィィィ。

近くでバイクを止める。

うげ…。

沢田達だ……。

「!?南?

あ、そうだ。明けましておめでとう」

「おぉ隼人!おめでとうー。

…何やってんだ?」

ま、沢田もいるなら隼人もいるよな。

他にいるのは、リボーン(チビちゃん)、隼人、沢田、山本、笹川兄妹、三浦ハル、ランボ(牛ガキ)、イーピン、キャバッローネの奴ら…。

そんで、あの女…。

「ボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦だ」

なんじゃそら…。

「風間、オマエも入るか？」

「断る。どうせ入ったら『これからファミリーの一員だぞ』とか言うだろ？

それに何よりメンドイ」

まぁ、誘ったのはリボーン（チビちゃん）だ。

「バレてたか。んで、何でここにいるんだ？」

「見回り。オマエらが何か風紀を乱すようなことしたら、オレがすぐにストレス発散させてもらうからな」

ストレス発散…。

最近しょっちゅうしてるんだけど、溜まるんだよ…。

「わかったぞ。さぁどんどんいくぞ」

今は羽根つきをしていたらしい。

でも百人一首、福笑い、たこあげ、すごろく…。

残念な結果だな…。

「あ――――、どーしよー！

このままじゃ1億円借金だ～～！！一生借金地獄だ～！！」

ウルサいなぁ…。

もし本当に１０代目になったら一億なんて余裕だろ…。

ボンゴレってデカいし。

「考えてみたらちょっとシビアすぎるな。

大人対子供だ。少しハンデをやってもいいぜ」

「ん」

「ディーノさん」

キャバッローネのボスは優しいヤツなんだな――――。

ま、どーでもいいけど――――。

…問題起こしてくれたらいいのに…。

ストレス発散できるから。

なんてことを考えてたら、もちを作り始めた。

「うっわ…。隼人超笑顔だ…。山本と一緒にいるのに…。

写メっとこ」

カシャッ。

「…ぷっ。後で隼人に見してやろう…」

オレが隼人いじりを考えてたら、笛が鳴った。

「まずはキャバッローネのアンコロもちだ」

「とりあえずつくってはみたが…。

オレ達の知識じゃあこれが限界だ」

出したのは、ボロ――…、とした、もちみたいなモノ。

「…まずそ…」

オレが思った通り、『パサパサしてまずいな』らしい。

ってかよく食ったな…。

「次、ボンゴレだぞ」

「うん。これ。

な！ポイズンクッキング――――！！？」

確かにポイズンクッキングだ。

ビアンキがいるし。

隼人…なんか可哀想だからいじるのは辞めてやるよ…。

写真は残すけど。

そしてリボーン(チビちゃん)が凄まじいほど寝て、沢田とディーノが逃走して終わった。

ま、逃げるよな…あれは。

「問題ナシだな。帰ろっと」

何も壊してないから問題ナシ。

これがオレの基準。

まぁ、コイツらに対しての基準な。

オレはバイクに乗り、家に帰る。

「さて…と、報告するか…」

ガチャ、と家の鍵を開ける。

すると、見慣れたけど家にあるはずがないモノが。

「……なんで？」

頭の中では分かってるよ？

認めたくないんだ。

ダイニングへのドアを開ける。

「何でいるのかな？報告は電話じゃなかったかい？」

恭弥だよ。

玄関にあったのは、靴だ。

「報告が遅かったからね」

そうなのか？

電話で報告…つか見回り自体が初めてだから、どんくらいで報告すりゃいいのか分からん。

「なら電話すりゃよくね？わざわざ家にいなくても…。

って、あ！どうやって入ったんだよ！」

鍵は三つあるが、一つは家。

一つは携帯し、一つは本来なら管理人だが、オレがそれを奪い、家の中。

管理人も、納得したから新しく作るなんてしない。

なら…？

「専門家に作らせたんだよ」

右手に鍵を持ちながら言う。

確かにオレの鍵と同じ形だな。

「…わかった…。扉壊さないでくれるならいいよ…」

壊されると、わざわざ十雅呼ばなきゃいけなくて面倒なんだよ。

そーいや十雅とも最近会ってねーな。

「ワォ。南が認めるとは思わなかったよ。

まぁいいや。もう扉は壊さないであげるよ」

「そりゃどーも」

恭弥は常に上から目線で言うけど、慣れてしまったから対抗はしない。

対抗したって、損するだけだし。

あ～、そういえばまだ1回も本気で戦ってないな～。

戦いたくないけど。

「報告は？」

「問題ナシ。沢田達が遊んでいたのを見ただけ。

あ、何も壊してなかったぜ」

「そう」

聞くだけ聞いて、テレビを付けた。

「……帰らないのか？」

「今日は疲れたからね。

早く何か作…らなくていいや。コンビニでいいから買ってきて」

「はい？」

あぁ、作って、と言おうとしてたな？

でも病院でのこと思い出したみたいだな。

「だから、今日ここに泊まってくんだよ。

早く何か買ってきて」

「…自分で行けよ…」

「僕は客だよ？」

「こんな客がいてたまるか。招待すらしてねーし」

でも、どうせ何言ったって無駄なんだよな…。

「ま、いいや。買ってくる」

それに、どうせオレは飯買いに行く予定だったしな。

コンビニでは、普通のお弁当を買った。

恭弥は一泊して、次の日の朝、オレが起きた時にはいなかった。

忙しいんだなー。手伝わないけど。

「…さて、この一年はどんな一年になるかね…」

雪が降り出した空を見上げて、そっと呟いた。

――――――このときは忘れていた。

この年は、オレの人生を大きく変えるかもしれない出来事があることを――――――。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２０　適任者！

「ふぁ～あ…眠ぃ…」

今日も疲れたー。

な、特に何もしないでウロウロしてただけだけど。

最近…つか１２月頃から、制服に私服がプラスされた。

元々Ｙシャツの中にＴシャツ着てたけど、今は寒いからＹシャツの上にパーカー着て、そんで学ラン。

結構温かいんだぜ♪

あー…恭弥からは最初は怒られたけど、無視し続けてたら何も言わ

なくなった。

プルルルルルル…。

「電話…？隼人じゃん」

ピッ。

「もしもーし。どうかしたか？」

『オレさ…やっぱ一人が向いてんのかな…』

は？何突然…。

「何でそう思うんだよ。ってか何でオレに聞くんだ？」

『周りから見たらどうなんだって思ったんだよ…。

今日リボーンさんが直接指導してくれたんだけどよ…上手く行か

なくて１０代目にまで迷惑かけて…』

へーぇ？

でもそれは、いつものことだと思うのはオレだけ？

「それで理由は全部か？」

『…そんで、山本が来た時に…』

あー、なるほどな…。

「沢田が頼りにしてるのが、隼人より山本だって思ったのか？」

『…あぁ』

隼人って馬鹿だな…。

「確かに、そうかもしれねぇな…。

でも沢田は少なくとも隼人のことを、大切な友達だとは思ってるだろ」

『…！』

頼ってる、なんて無責任なこと、オレは言えない。

でも、沢田が隼人のことを大切な友達だと思ってるのは言える。

『南から見て…そう思えるか…？』

「あぁ。それに隼人がいないと沢田も寂しいと思うぜ？

どうせ今、沢田のとこから出てきたんだろ？早く行きな」

『南…ありがとな！』

プツ。

電話が切れた。

「隼人のやつ…突然どーしたんだろ……ま、悩みは解決したみたいだし、気にしなくていっか」

そう呟いて、家の鍵を開けた時。

『南！』

脳内に声が響いた。

「家の中に入ったら、出て来い」

バタン、と扉を閉めるのと同時に十雅が現れた。

「今日は何の用？」

「出来たんだよ！千本が！」

千本、毒千本、痺れ千本、解毒剤。

「早かったな」

「まあまあ頑張ったからなっ！」

使うかもしれないのは黒曜からだし、セーフだな。

そして、こないだ買ったポーチに千本を入れる。

三種類全部入れてもまだ余裕がある。

小型パソコンとかも入るし、ピッタリだ。

「さて、明日から練習するか…。

十雅、もう帰っていいぜ」

「……もう一つ、話がある…」

少し低めの声で言ってきた。

「…何だ？」

「山下の…正体が分かった」

「！！」

アイツの正体か…。

「で、何者だったんだ？」

「その前に…少し話をさせてくれ」

アイツの正体に関係あるのか…？

「わかった」

「長くなるから、座って話そう」

ダイニングに向かい、向かい合わせになっているソファーに座った。

オレと十雅が座ると同時に、十雅は口を開いた。

「まず、オレのことを“神”という…これは分かるな？」

「信じてなんかねーけど、わかるぜ」

「…まぁ、話を続ける」

お、もう反論してこないな。

「で。オレが住む世界を“神界(しんかい)”という。これは神１人とその下に使える“天使”１００人の世界だ。

もちろん“神界”以外にも世界がある。まずは“神界”と似ている世界、“魔界(まかい)”だ。

この世界もトップは一人で、“閻魔(えんま)”。その下には同じく１００人、“悪魔”が使えているが…“閻魔”も“悪魔”も、悪い奴ではない。ただ見た目が怖くて、心を鬼にしただけだ。根は優しい。

一般に地獄、と呼ばれる場所が“魔界”で、天国と呼ばれる場所が“神界”だ。

死んだ人間が悪事を働かせてたら“魔界”にてその分の倍の刑を受け、“神界”に送られて再び人間になる。

たった一つ、思い出を残してな…」

「思い出？」

「あぁ。生まれつき〇〇が好き、とかあるだろ？あれが“思い出”だ。

ちなみに、送られてきた人間は“神界”や“魔界”では生きられないから、ノーカウントだ。

話を戻す。もう一つ、世界がある。それが今いるこの世界…命ある者が生きる世界、“生命界（せいめいかい）”だ。

オレ達には命はないが、この世界の者には命がある。人間、動物、植物…これらが全て、“生命界”に生きる者だ。

ただ、この“生命界”に住む者はいない。“神界”なら永遠に“神”と“天使”が住んでいるが、“生命界”は巡り続ける。

だから“神”と“閻魔”が“生命界”を守っているんだが、これは別に関係ないな…」

ハハハ、と十雅は苦笑した。

きっとコイツは、巡る命が欲しいんだ…。

永遠に生きる、という言葉は一見良さそうに思えるが、つらかった

り、悲しかったりする思い出が溜まっていく。

喜びもあるだろうが、パッ、と思い出すのは後悔などの負の感情の方が多いしな…。

決して巡ることの無い命…。

「……南、聞いてるか？」

「ん？あぁ、聞いてるぜ。話、続けてくれ」

オレの返事を聞くと、十雅は少し下を向いて話し出した。

「普通はこの３つの“三世界（さんせかい）”で成り立っているだけど…。

数千年前、新たに“世界”ができてしまった…。

“異端者が暮らす世界”の…“異端界（ヘレシー）”だ」

『ヘレシー』…英語で『異端』、か。

「この世界は“三世界”に不干渉だったんだが、ある日突然、干渉してきた…。

オレ達の“神界”にな。だが、アイツらは自分達の情報を一切伝えずに干渉しようとした。

『オレ達の世界…“異端界”も“三世界”に加え、“四世界”にしてくれ』、とな…。

オレ達は断った。だが、向こうは引かなかった…。

…そして……」

十雅の拳に力がこもっているのが分かる。

「……当時の“神界”のトップ…“神”を殺した…」

「！！！」

まさか…殺すまでするとは…。

「ってあれ…？命ってないんじゃ…？」

「…そう、無い……だから、存在を消したんだ…」

存在を…？

「だからオレ達の記憶からも当時の“神”のことは消えてしまった…。

たった一人、オレを除いてな」

「？何で十雅は覚えてるんだよ」

「その殺された“神”の後任がオレになったんだ…。だから、オレは覚えている…。

更に、その時の“神”はオレのアニキだったしな…」

十雅はポケットに手を伸ばし、一枚の紙を渡した。

でも、見ても真っ白。

「何？これ…」

「それは写真だ…その写真にはオレのアニキ…零（ゼロ）が写っていた。まぁ、零のことを覚えている奴しか見えねーけど。

零は“閻魔”の親友でな…二人で“三世界”を作ったんだ。

あぁ、世界を創った者同士だったから“閻魔”…烈華（れっか）も零のことを覚えてる」

「烈華って…女？」

名前に『華』があるから女っぽいけど…。

「ん？あぁ女の人だ…怖いけどな……」

ま、“閻魔”だしな…。

「で、“異端界”の者はアニキを消して満足したのか…。

それ以来、名前すら聞かなくなった……つい、この前までは」

「！！！」

なるほど…よーやく分かったぜ…。

つまり――――――――――。

「あの女は、“異端界”によって送られた」

「そうだ。

あの女は“生命界”に住んでいた普通の人間だったんだが、“生命界”と“異端界”の２つに暮らす者になった。

まぁ、“生命界”に暮らしているから“命”はあるから殺せるがな。

でも“異端界”の者だからオレらは干渉できない」

なんだよ…じゃあ一切手出しできねーじゃん。

「干渉できるのは“生命界”にいる者だけだ。まぁ、オレは普通の人間なら間違って殺せるんだけどな」

イライラ…。

思い出して、ムカついてきました♪

「あ…悪ぃ…。

そんでさ、南には色々悪いんだけど、“神界”と“魔界”に関わる人間になってくんね？

“神界”や“魔界”の者にならなくて大丈夫だから、関わりだけ。

今の南じゃ“異端界”の者に何もできないけど、関わりが出来れば“異端界”の者に干渉できるし」

…そうなれば、あの女を殺せる…？

「アイツを殺すことができるようになるなら、喜んで関わりをもつぜ」

「サンキュー！！じゃあ、“コレ”と“コレ”に触れてくれ」

出されたのは、真っ白な水晶に、真っ黒な水晶。

まぁ、白が“神界”で黒が“魔界”だろう。

「おう…。

って、何だぁ！？」

触れた途端、光り出したのだ。

「…やっぱ南が“適任者”だったな…。

まぁ、これで“関わり”ができたからな」

「…“適任者”って？」

「あー、“関わり”を持つことのできる人間。世界にたった一人だけど、ソイツが死んだら、誰か別の者になる。

ま、南かどうか確信は無かったけど多分そうだろうと思ってたから」

…どんな理由だよ…。

「あ、オレだってテキトーな気持ちで南だと思ったんじゃねーぜ？

一応記録見て、名前は書いてなかったけど南にピッタリだったから」

あーはいはい。

便利ですねー。記録って。

「で、もう少し話いいか？」

まだあんのか…。

もう疲れた…。

「……しゃーねぇ…少しにしてくれればいいぜ」

「サンキュ。“異端界”と、山下咲の狙いが分かった」

「！！」

狙い…？

「まず、“異端界”。

コイツらは山下咲を使って世界を手に入れることが目的だそーだ。
山下咲が“適任者”ならすぐだったんだが…それは南のことだったからな。
だからこれから南が“異端界”に狙われるかもしんねぇけど…」

「…それ、言ってないよな？」

「あ……って南！！真っ黒な笑み浮かべないで！！怖いから！！その持ち上げた手を下ろして！！」

……ハァ、仕方無い…。

「…でも、聞いててもオレは断らなかったからいい…早く話せ」

「お、おう…。
で、どーゆーわけか、“異端界”の者が“適任者”を殺せば、殺した奴が“適任者”になれるらしいんだよ。
ま、理由はアイツらが持ってる特殊な力を使ったんだろうけどな」

「力？」

「あぁ。オレ達にも力がある。“神”なら命を吹き込む力、“闇魔”なら罪を浄化する力…。

“異端界”って言われるくらいだから、特殊な力があんだろ」

あー、確かにありそーだな。

っつかさ、命狙われるなんて聞いてないよ？

まぁいいけど…。

「で、山下咲の狙い…」

何だ…？

アイツの狙いは…。

「アイツはな……“異端界”の者と利害が一致したから手を組んでるらしい。

なんでも“異端界”の主(ぬし)に救われたらしくてな。

で、アイツ自身もリボーンが好きらしいしな。

それで偶然にも南が送られた世界がリボーンの世界だから、来たっつーことらしい。」

「へー…じゃあただ単に、恩を返すのと、リボーンの世界に来たかったっつーこと？」

「ま、そーゆーわけらしい……」

なんだ…もっと悪いこと考えてんのかと思ってたのに…。

「これで話は終わりだ。悪かったな…長くなって」

「別にいい。オレも知りたかったことだったからな」

でも疲れたけど。

「そんじゃな」

「おう…」

フッ…。

十雅は一瞬で消え、そこには一枚の紙が残されていた。

十雅の兄…零が写っていたはずの写真だ。

拾って、もう一度見る。

「!?写真が…見える!?」

そこには、十雅よりも少し大人っぽい顔つきの男…。

でも十雅と似ている。

髪の色、目の色…。

どちらも十雅と同じだ。

「……これが…零…十雅のアニキ、か…」

どうせ十雅はオレが机の上に置いた写真を持っていき忘れてたんだ…。

写真をピッタリサイズの袋に入れ、再び机の上に置いた。

「オレは…なんでこの世界にいるんだろうな…」

オレ自身のことなのに、ふと疑問に思った。

答えは、いつ出るのだろうか…。

Straordinariamente3　オレンジ親子に会う！

南は今、再びイタリアに来ていた。

そしてまたもや『暇つぶし』で。

今回は十雅を脅して金を貰い、その金で来た。

「んー、久しぶりのイタリア！！」

夏休みに二回目のＶＡＲＩＡに行った時以来だ。

もちろん、今も手ぶらだ。

腰にポーチがあるが、それだけ。

日帰りで帰る、というノープランな状況で来ることができるのは南だけだろう。

「今回はどこ行こうかな…前みたいに『テキトーに行ったらマフィアでした』は嫌だし…。

ん、今回は人通りが多い道を進もう！！」

それはつまり、行き当たりばったり、ということだ。

「っと、その前に飯だ、飯」

視界に入っている店に入る。

とりあえず一番人気のピザを頼み、食べる。

「んー、さすがはイタリア。日本のとは違うな」

そう言った時だった。

「相席(あいせき)いいかしら？」

日本語だ、と思って顔を上げた。

優しそうな大人の女性で、首からはおしゃぶりが下げられている。

南はこのおしゃぶりである人物が浮かび上がったが、その動揺は顔には出さなかった。

相席、という言葉を疑問に思って周りを見渡すと、店内は満席状態。

「いいッスよ。日本人…ではないですよね？」

「えぇ。私は日本人じゃないわ。日本語は勉強したの」

「へー。オレは風間南っていいます」

「私はアリア。それと、もう1人いいかしら？」

アリアが目をやった先からは、ピザを持ってこちらに来る女の子。

「あの子ですか？」

「えぇ。ユニ！ここ、相席で良いって！」

ユニ、と呼ばれた少女はアリアの声を聞き、足を速めた。

「ありがとうございます！私はユニ、といいます」

「（未来編の時よりかは幼いな…）ユニ、な。オレは風間南！」

南は、この二人が誰か分かっていた。

未来編で初めて出てくるオレンジ色のおしゃぶりを持ったユニ。

そして、１０年後では亡くなってしまっているユニの母、アリア。

決定打となったのは五弁花のマークと、アリアが持っているオレンジ色のおしゃぶりだ。

「悪いわねー、南君。相席してもらって」

アリアがそう言いながら椅子に座る。

「相席は気にしないでいいって。あの…さ。オレ一応女だぜ？」

「「…え……？」」

二人の声が重なり、動きも止まった。

ユニもアリアも、南が男だと思っていたようだ。

「あぁ、謝ったりはしないでいいからな？毎回のことだから慣れたし」

まだ動きが止まっている二人に言う。

「…いや、それでもごめんなさいね」

「ごめんなさい…」

「だから、謝ることねーんだって。ま、これからは呼び捨てでいっからな。んじゃ、食おうぜ」

南はそう言いながらピザを食べ始めた。

そして南を見て、アリアとユニも食事を始めた。

「ねぇ、南。あなたはイタリアに旅行に来たのよね？」

「んー？…ま、そーかな」

実際は暇つぶしなのだが、旅行と言っても変わらない。

「なら…どうして手ぶらなの…？」

そう、今の南は完全に手ぶらだ。

財布や携帯もポーチに入れているため、何も持っていない。

「だって、日帰りで来たから。元から暇つぶしのためだったし？」

当然だ、と言わんばかりの顔をして、アリアに返事をした。

「…わざわざ日本からイタリアに、暇つぶし…？」

「あぁ。そーだけど？」

「……そう」

アリアはそれだけ返事をして、食事を再開した。

「んー。ウマかったな！」

南とアリア、ユニは店から出た。

話しながらゆっくり食事をし、おまけにデザートなども食べたので、もう時間は結構経っていた。

「そうね。南、改めてありがとう。一緒に食事ができて楽しかったわ」

「私もすごく楽しかったです。日本（ジャッポーネ）の話とか、初めて聞くものばかりでした」

「オレの方こそ、ありがとう。ユニがそんなに喜んでくれたなら、オレも話した甲斐（かい）があるよ。

それに久しぶりに『家族』って感じがわかって、懐かしかったしな」

そう、南には家族がいない。

そんな中、アリアとユニと出会って『家族』というものが改めて感

じられた。

二人を見ていると『家族』、『親子』というものが理解できて、それが何となく嬉しく、楽しかったのだ。

「南…あなた、もしかして……」

アリアとユニは気まずそうな表情をした。

今の南の言葉で、南に家族がいないことが分かったのだ。

「別に気にしなくていいぜ。オレはもう、かれこれ五年くらい一人で暮らしてるからな。

それに今は……」

南は顔を少し上にあげて、続きを言った。

「今は、大事な仲間が…友達がいるから…な」

そう言う南の表情は、今まで見たことも無いくらい優しい表情だった。

南の表情につられてか、アリアとユニも優しい表情になった。

「ねぇ、南さえよければ私達が家族になるわよ？」

「へ？」

突然のアリアの言葉に、素っ頓狂（すっとんきょう）な声をあげる。

「私も大歓迎ですよ！」

アリアだけではなく、ユニも言った。

「え、いや…でも、それは…さ」

突然過ぎるアリアの言葉に、動揺する。

「家族だからって何も束縛されたりはしないから大丈夫よ。
ただ、南にとって心の拠り所の内の一つになってくれれば、それでいいの」

「……でも、オレには……」

今度は下を向いて、口を開いた。

『家族というものが、もう分からない』

小さな声でそう続けた。

その言葉を最後に、しばらくの静寂が三人を包んだ。

「でも、それでいいんじゃないですか？」

静寂を破ったのは、ユニの声。

「ユニ？」

「私も家族、というものがどういうものかは正確には分かりません。血の繋がりは確かにあるけど、そうじゃなくても家族でいいと思うんです。

一般的にも、父と母、という親同士は血が繋がってないですから」

ユニは先ほどのように優しい笑顔でそう告げた。

「……ありがと…な……」

「それじゃ、南は私達の家族決定ね！！」

「ちょっとアリアさん！？なんかいきなり話飛んでね！？」

「えー…じゃあならないの？」

アリアの言葉に、少し考える南。

「…はぁ、もういいや。何でも」

「なら決定よ！敬語はダメだから」

「ん。わかった。ユニもオレには敬語禁止な」

「わ、私もですか！？」

「「だから、敬語禁止」」

「……はい…わかった」

少しため息混じりに言っていたが、ユニの表情は嬉しそうだった。

「それじゃあ、私は『南お姉ちゃん』って呼ぶね」

「ん、わかった。あ、でもオレ、アリアさんのことはさん付けで呼ぶから」

「えぇ。いいわよ」

アリアが返事をした時だった。

突然、南が何かを思い出したように『あ』と言った。

「ヤベ！そろそろ時間だ…。アリアさん、ユニ、連絡先教えてくんね？」

「本当に暇つぶしの旅行ね…。はい、これが私のアドレスと番号。ユニに連絡取りたい時もこっちによろしくね」

メモされた紙を受け取り、南は空港に足を向けた。

「また来る時は何日かで来なさいよ！そしたら私達の家に泊まらせてあげるから！」

「また日本（ジャッポーネ）の話聞かせてね！」

「わかった！んじゃ、またな！！」

南はそのまま、空港へと姿を消した。

「…ホント、不思議というか…変わった子だったわね」

「……次会えるのは、いつかな…」

「きっとまた、来るわよ。何せ『暇つぶし』でイタリアへ来るような子だもの」

アリアの答えにユニはふふ、と笑い、飛んでいく一機の飛行機を見つめた。

「まさか、また原作の人間と会うとは…」

南は飛行機の中で、呟いた。

日本にいる時は仕方ない。

自分が住んでいる場所も、同じ並盛町なのだから。

だが、イタリアは広いし、会うことのできる人数も少ない。

「…これからが楽しみになってきたな…」

そう言い残し、南は日本に着くまで眠っていた。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２１　授業参観！

今日は授業参観の日。

もうすぐ授業開始だ。

…でも、一つ心配事。

オレは、一応風紀委員だ。

そんなヤツがクラスにいて、マトモな授業になるか？

…ならないだろう。

そんなところに、リボーン（チビちゃん）が来たり（沢田の家庭教師だから１００％（パー）来る）したら？

…想像もしたくなくなってきた…。

ま、テキトーに過ごすか。

…飽きたら応接室に行こーっと。

キーンコーンカーンコーン…。

「今日は授業参観ということで、みんな緊張していることと思いますが肩の力を抜いていつも通りの姿を見せればいい。

先生もいつも通りミスするからな。

よろしお願いします、父兄の皆様、風間さん」

オレに対しての敬語と他の生徒に対しての言葉でぐっちゃぐちゃになってんぞー。

「じゃあこの問題。今日はあえて数学の得意でない生徒からあてていこうかな。

山本いってみるか？」

そーいや山本って勉強苦手だったよなー…。

「ちぇ。いきなりかよ――」

「いつもの汚名返上といってくれ」

…教師の奴、何気（なにげ）にヒドイこと言ってるよな…。

「んじゃ1／2（二分の一）あたりで」

「コラ！またおまえは当てずっぽうで……ん？

いや…正解か」

「イエーイ。ラッキー！」

「いいぞ山本！！」

「いーぞ、武！！今夜は大トロだ！！」

「ったく親父～っ」

あれだけで大トロってスゲー家族だな…。

親バカにも程があるぜ…？

「ったく。くだらねーぜ」

「ご…獄寺…私語はつつしまんか…」

「け」

あー、皆に不良って言われてるな～。

ま、オレの態度はもっとヒドいぜ？

…聞きたい？

まず、隼人と同じく机の上に足を乗せる。

そして、机の端にはお菓子。

更に学校内の自販機で買ったジュースを飲んでいる。

イヤホンを片耳に付け、曲を流す。

片耳だけにするとか、オレ偉くね？

ん？皆見て見ぬフリしてるからな！

「…そーだな…あっとる。よし次！

山本も今日はがんばったし…山下！」

あ？何かあったのか…？

あぁ、隼人が少ぉ～し難しい問題解いたのか。

つかよぉ……あの女に当ててんじゃねぇよ！！

イライライライラ…。

おっと、殺気は抑えよう…。

「えっえと…。ええ～！？」

「落ち着いて考えろ。……仕方ない…沢田！山下の代わりに問4！」

…アイツ馬鹿なんだな…。

ってかあんな簡単な問題分かんないのかよ…。

「9！？」

パコーンッ。

「ぎゃっ」

お〜、ぞうりが…。

てか9…？

その三分の一だ。残念。

「あいた〜」

「どーした沢田。何だ今の音は？」

「後ろから何かが…。！キモイおばちゃんいるー！！」

…リボーン（チビちゃん）、やっぱ来たか…。

たまにオレに視線…つか殺気感じるんだよな…。

「沢田どーした？」

「いや…あの…」

「はーい！！１００兆万です」

「ランボ！！」

…死ね。

ついでにオレを殺そうとしたイーピンもいるし…。

「君は誰の弟君かな？お父さんかお母さんは？」

「ランボさん九九もできるんだよ！
ニニンがニ！キキンがキ！ケケンがケ！！」

おい、意味不明な九九してんじゃねェよ。

さっさと消えな。

どっ、と笑い声が聞こえる。

「見てて見てて」

フッ。

キュッ。

キュキュ――――ッ。

あーぁ、黒板消した…。

でもな、それよりイラつくんだよ。

オレはイラつきを抑えるなんて面倒なことはしたくないので、言うことにした。

「…オイ…」

教室内の人間が、一部を除いて真っ青になる。

「ななななな何でしょう！！？」

教師が声を発する。

「…このガキ達は何だ？ウルセェんだよ…さっさと追い出さないと、オレが消すぜ…」

「ごごごごごめんなさい！！」

教師がド・ゲ・ザ★

教師の土下座見るの二回目だな。

根津の時と、今と。

いきなり沢田が叫んだ。

「あ――――！！イーピンが照れて…もう残り三箇しか…」

うぉ！？

また爆発しそうじゃん！

沢田はイーピンを捕まえて廊下に出た。

ドオォン…。

外には大きな花火が…。

「ふー。ギリギリセーフ…」

沢田が戻ってきた。

「沢田、さっきのヤツとコイツはオマエの知り合いだよな…。どっかにやれ」

「えっオレ――――!?」

しかし沢田の親が出てくる。

「すいません、うちの子達なんです」

「母さん!!」

あぁ、誤解が広まるな…。

「ランボさん京子と遊んでく」

「コラ――――!!

ちょっと母さん、何でチビ達つれてきたんだよ！！」

「さあ…」

「さあって何だよ！？

わけわか…「私よ」！」

「隼人の授業参観についていきたいっていうから」

「ビアンキ！！！」

ビアンキ登場、つまり…。

「うがっ。ふげ――――っ！！がっ」

あぁ、ナームー。

「先生大変です！！」

「獄寺君が倒れました！！」

ピクピクしてるし…。

大丈夫か？

「なぁ！？」

「獄寺君大丈夫？」

「とにかく保健室に運ぼう」

「私もご一緒しますわ」

ここまではセーフ、だが…。

「私もいくわ。隼人、私がついてるからしっかり」

「ふわっ」

さらに悪化したし…。

「緊急事態ですので一時授業を中断します。
父兄の方、そして風間さんにはご迷惑おかけしますが、各自自習をして待っていてください」

そして、隼人、教師、ビアンキ、沢田母、ランボ(アホ牛)が消えた。

教室はザワザワしている。

「コラ――。静かに――。授業再開するぞー。はい注目〜。

オレが代打教師のリボ山だ」

…何やってんだ…？リボーン（チビちゃん）の奴…。

「父兄の皆さんも、なにとぞヨロシク」

ま、姿は変だけど礼儀正しいから受け入れちゃうよな…。

「えーっと。では、さっきの授業をひきついで、まずはこれ。

わかる奴」

黒板にはぎっしりと問題が書かれた。

ん～、答えは√5だなー。

「ちなみにこの問題を解いた奴は、いいマフィアの就職口を紹介するぞ」

…言わないでおこう。

ま、元から答える気なんて無いけど。

「おい！

リボ山だかヘボ山だか知らねーけどよ、お前なんか相手にしてらんねーよ！！」

「私語はつつしまんか」

パアン。

お～、チョーク粉砕したねぇ。

「ちょっとあんた――――！！うちのオサムちゃんに何するザマス――――！！」

「お母様落ちついてください」

パアン。

母親もやられたな～。

「おい、じゃあ解いた奴は紹介ではなく入ってもらうぞ。風間、解け」

…こーなるの、なんか予想できたよ…。

「イヤでーす。わっかりませーん」

「オマエなら余裕なハズだぞ。『帝王』に通ってたんだからな」

おい、バラしてんじゃねーよ。

「おい、それなら風間さんはあの天才と同一人物か？」

「多分そうよ！さっすが風間さん！かっこいい～」

「サイン貰っとこうぜ！」

ひそひそウルサい…。

「…黙れ」

ピキィッ。

教室がオレの一言で静まった。

「じゃあ風間、答えを言え」

「だから、オレは答える気ねぇし」

「分からないってことになるぞ」

「別にどうぞ？勉強なんかに誇りもプライドもないし」

「…チッ」

ようやく諦めたか…。

「はいはーい！！うんこ」

…消えろ。

「ペケ」

ピューッ。

ドガーン。

「ぐぴゃああっ！！」

ランボ（アホ牛）、リタイア。

「アホ牛が…。この問題、見たことが…あります」

「獄寺君！！」

「答は√5だ！！！」

「おまえはすでにマフィアだろ」

ピューン。

ドガァン。

「ぎゃあああっ！！！」

隼人、同じくリタイア。

「獄寺君――――！！！

ランボ！！獄寺君！！大丈夫？」

沢田が二人に駆け寄る。

「おい！やりすぎだぞリボーン！！」

「カチンときたからなカチンと」

「おまえ、そんな理由でなあ！」

ここで、ヒソヒソと声がする。

「やっぱり…」

「やっぱり沢田がらみだったんだ…」

他にも随分言ってるな…。

「じゃー、どーにかしてやれ」

ズガン。

「復活(リ・ボーン)!!死ぬ気でオレが教える!!

てめーらこれしきも分かんねーのか!!ぶっとばすぞ!!」

見事な開き直りだこと。

プルルルルルル…。

電話…。

「もしもしー？」

『仕事ができたから応接室来て』

…恭弥か…。

「ヤだよ」

『君に拒否権はないよ』

「あのな、人間には拒否権くらいあるぞ？」

『そんなの関係ないよ』

「じゃ、逃げるわ」

プツッ。

さて、鬼ごっこ――――――――

ガラガラッ。

「やぁ、逃げられると思ってるのかい？」

――――――――は、始まってましたー。

「逃げ道なら他にもあるさっ！「待て！！」

…何だよ…」

死ぬ気の沢田が話しかけてきた。

「今はオレの授業中だ！」

「んなこと知るか。じゃな」

窓から逃げられるさ！

ヒュー。

スタッ。

着地成功★

さて、恭弥と沢田は…よし、追いかけてきてねェな。

こうして沢田と恭弥からの逃走を成功させましたとさ。

Ｅｐｉｓｏｄｉｏ２２　バレンタインデー！

今日は、南にとってある意味一番嫌いな出来事がある日。

それは、バレンタインデー。

恋する女子が好きな異性に、自分の思いと共にチョコを渡す日だ。

もちろんその他にも、友チョコ、義理チョコ、逆チョコなどがある。

しかし本命チョコは、異性に渡すものだ。

…それなのに、南は前世で…。

朝、下駄箱に溢れているチョコ。

教室でも机の中にパンパンに入っているチョコ。

机の上にも山になっているチョコ。

手渡しで渡されるチョコ多数。

南は女であるのに、本命ですから、と言って渡す者もいた。

しかし、南はそれらを受け取っていない。

直接渡されたのは『いらない』と言って突き返した。

勝手に入れられていたチョコは全て捨てた。

というか、下駄箱なら床に落とし、机の上・中も床にバラまいた。

もちろん、その行動は良くない。

だが、それでもチョコを渡した者は『私のはちゃんと受け取ってもらえたわ』と思い込んでいるのだが…。

南は今日、そのような事態にならないことを祈った。

学校の昇降口。

南の下駄箱だけ、明らかにおかしかった。

まず、何かが溢れている。

いわゆる、チョコ。

南は一度大きなため息をつき、辺りをキョロキョロと見渡す。

風紀委員を探しているのだ。

そして見つけた風紀委員にチョコを処理させようとしている。

すると一人発見した。

「おい」

南が声をかける。

「！？あ、風間先輩！？」

「…先輩？」

「あ、我々下っ端は先輩って呼ばさせていただいてるんです！

ところで、何かご用でしょうか？」

あぁ、なるほど、と納得し口を開く。

「デカいダンボール箱持って、ついてこい」

「？はい…」

そして数分後。

「持って来ました！」

なかなか大きなダンボールを持ってきた。

「んじゃ、こっち」

さっきの場所に戻る。

「こ…これは…？」

「…多分チョコだよ…ここのが集め終わったら、教室までついてこいよ」

「は！！」

テキパキとチョコを綺麗に詰めていく。

南は少し感心していた。

バランス良く積んで、重い物の計算もしながら積んでいるのだから。

「これで全部です」

ダンボールは7分目辺りまで埋まっていた。

「おう。んじゃ、教室だ」

そして1－Aに行く。

ガラガラッ。

「……やっぱな…」

机の上も中も周りもチョコまみれ。

「さっさと頼む」

「はい！」

そしてまたキレイに積んでいく。

そしてここにある三分の一を詰め終わったところで、ダンボールがいっぱいになってしまった。

「すみません、新しく箱を持ってきます」

「…ついでに一箱目を応接室に運んどいて」

「はい」

さすが、風紀委員である。

チョコがパンパンに詰め込まれたダンボールを、ものともせず持ち上げて運んだ。

「南！」

風紀委員がいなくなったところで、隼人が南を呼んだ。

「何だよ…」

「…スゲェ数だな…」

「……そう…だな…」

ハァ、とため息をついて言った。

「前の学校ではどうだったんだ？」

「同じような状況…でもこっちの方が多いかもな…」

「そ、そうか…」

「あ、隼人いるか？」

南が机の上にあるチョコをテキトーに取って聞いた。

「あのな…南に渡してるんだ。それにオレもいい」

「ハァ…これだから２月１４日は嫌いだよ…」

「まぁ仕方ねぇよ…。

おい、さっきのヤツ戻ってきたぜ」

さっきより大きいダンボール箱を持ってきた。

「んじゃ、詰めるの再開して」

はい、と返事をしたが、一人で詰めるのも大変だ。

「あ、あの…風間さん！」

後ろから声がして、振り返った。

「…何だよ」

「チョコ、貰ってく「いらねぇ」」

南は即答し、断った。

「…そう、ですか……で、でも、食べてくれなくてもいいので、受け取るだ「帰れ」」

南は少し睨みつけて言った。

でなくては諦めないと思ったからだ。

南にチョコを渡しにきた女子はトボトボと１－Ａを後にした。

今の南の言葉を聞いていたからか、廊下に南にチョコを渡しに来た他の大勢の女子も帰った。

１０分後。

ようやくダンボールにチョコが詰め終わった。

詰めたチョコは、応接室に運ばせた。

ちなみに、応接室にも南へのチョコが大量にあった。

キーンコーンカーンコーン…。

チャイムが無い終わり、もう一つの音が鳴った。

プルルルルルル…。

南の携帯の着信音だ。

「も…もしもし…」

ヤッベー、と内心で言いながら電話に出た。

『応接室にあるダンボール箱は何？』

「…分かったよ…今から応接室行く…」

『早くしてね』

プツッ。

恭弥からの電話だった。

「…帰りたい…」

しぶしぶ応接室に行く。

途中でチョコを渡してきた者もいたが南が即答で断り、皆トボトボしながら教室に入った。

「来たぜー…」

応接室到着。

「それじゃあ、このチョコ片付けてね」

「…焼却炉へＧＯ！」

「そのためにかかる費用は全て、君が出してね」

「…それは嫌だ……。

……あ」

何かを思い出したかのように、フッ、と呟いた。

今日凪と会う約束をしていたのだ。

「ところでさ、僕にはないの？」

「は？何で恭弥にあげなきゃいけないんだよ」

「お世話になった人に渡すものでしょ」

「お世話になってない」

恭弥はハァ、とため息をはいた。

「…まぁいいよ。南が作るとも思わないし、君の料理は食べれないものだからね」

「だから、オレは買うんだよ！今日、オレの親友に渡しに行くし！」

凪は南の親友になっていた。

それは意外にも、凪が言った。

それは、ある日電話をしていた時のことだ。

『南…私と…あの、その…』

『ん？どーかしたか？』

『えっと……私と…親友、に…なってください…！』

『！凪……』

『ダメ…？』

『何言ってんだ！オレ達もう親友だろ？』

『！南……ありがと…』

と、まぁこんな感じだった。

「じゃあ僕のも買っておいてね」

しまった、と南は瞬時に後悔した。

「いや「じゃあこのチョコを全部食べてね」あーもー分かったよ！！」

全部食べるなんてムリだし、南が食べるとも思えない。

しかし過ぎたことは仕方無い、と思ってドアの方に向く。

「んじゃ、オレ一旦帰るな。恭弥にチョコあげる代わりにチョコの処理頼むからな」

「ハァ…仕方ないね」

買い物すらも面倒だと思いながら学校を出た。

商店街にある店に着いて、チョコを選ぶ。

ちなみに、店員は南のことを知っている。

商店街で南のことを知らない者はいないのだ。

「ん、凪のはこれにしよっと」

南が凪に選んだのは、ブラウニー、トリュフ、チョコチップクッキーが一つのボックスに入ったもの。

値段は２５００円と、高い。

だがそんなことを全く気にせずにカゴに入れた。

そして恭弥の分。

「どーせなら隼人の…いや、あと十雅の分も買うか…」

チョコを買う金は十雅のものだが、そんなことを気にする南ではなかった。

結果的に三人には同じものを買った。

生チョコが六個入った、普通のチョコだ。

店を出て、更にもう一軒の店に入った。

南がよく来るアクセサリーショップだ。

ちなみに名前は『ｊｅｗｅｌｒｙ　ｎａｍｉｍｏｒｉ』。

本物のルビーなども売っているからこのような名前になっている。

「いらっしゃいませ、風間さん」

「電話したものはあるか？」

「はい、こちらに」

南は店長のあとをついて行った。

南が電話したもの…それは、ペアリングだ。

実は凪に『親友になって』と言われたのはお正月の頃で、それから

は会えていない。

なので、南なりのお礼のつもりだ。

「こちらです」

店長が指差した先には、何種類ものペアリングが置いてあった。

南は凪との…親友と付けるものだと言ってあるので、恋人同士が付けるようなものは省いてある。

「思ったよりは種類があるな…せいぜい１０種類あればいいと思ってたからな」

「ありがとうございます。風間さんに喜んでもらえたなら、用意した甲斐(かい)があります」

そして、南はジックリと選び始めた。

選び始めて一分経った頃。

「決めたぜ。これにする」

南が持っていたのは、シルバーリング。

本物のシルバーなので多少手入れに手間がかかるものだ。

「さすが風間さん。すばらしいものをお選びになりましたね」

「オレはあげる奴に似合うものを選んだだけだ。さっさと会計」

「かしこまりました」

値段は万単位と高かったが、そんなことは南にとってどうでも良かった。

そして、凪と待ち合わせをしている公園に急いだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6945y/

家庭教師ヒットマンREBORN!　自由な風、来る！～改～

2011年12月12日23時45分発行